特116
697

觀世流改訂謠本

内十九

白髮
盛久
佛原
善知鳥
小鹽

特116
697

帝國圖書館藏

特116
697

觀清閣之印

大正
14. 4 20
閃文

白髭

解題 天皇御霊夢ありて敕使を白髭社に遣はされたるに、明神出現して社祠の縁起を語り、亦奇特を現じて御代を祝ひしことを作る。五音曲條々に出でたり。二百十番謡目録に觀阿彌作、能本作者註文に金春禪竹作としたれども、共に古記に據るところ無し。曲名に白鬚の字を當てたるもあり。

謡ひ方梗概 竹生島に似通ひたれどそれよりは通じて莊重に嚴肅なるべきものとす。

シテ 老翁なれどさのみは抑へず、強々としたる方なるべし。出の一聲は眞之一聲の位をとりて大きやかに確りと靜なるべく、サシより少しさらりとなり、下歌にて緩め、上歌を暢び〳〵と朗かに謡ふ。「比良の山風」云々の返しはツレのみに謡はせシテは謡はず。ワキとの問答は位を保ちて落着好く確りと應ふ。サシは心持を新にし、クリ地の位よりも輕やかにすらりと謡ひ、「われ八相成道の後」云々はおつとりとあるべく、クセの上端は引き立てゝ確りと、今は何をか」云々の詞はおんもりと言ひ、地渡し前の「給ふべしと」を心して確りと止む。後は老いたる神體なれば十分にどつしりと、威有つて大なるやう扱ふが宜し。此心得にて「神は人の敬ふによつて」云々と出で、「いざ〳〵さらば」云々を稍さらりめに、「面白や此舞樂」は靜に、「かくて夜もはや明方の」は心持を別にして寛りと謡ふ。

ツレ 好くシテを助けて謡ひ、一人にて謡ふ處はシテよりも調子を高めにとるべし。

ワキ 確りとして清く淀み無きを旨とす。後の「あらありがたの」云々はサシの調子にてさらりと扱ふ。

地 初の「瑞垣の」云々はどつしりと出で、「頼もしや」と廻シの後を少し抑へ、「われは」よりは前に比べて少しさらりと扱ふ。クリは改めて確りと謡ひ起し、サシ以下すらりとあるべし。クセは花筐、歌占のクセと併せて俗に三難クセと稱する謡ひ惡きクセなれば能く師傳を得て究むべきも、凡は極めてどつしりと扱ひ、複雜なる節の爲にこせつかぬやう心附けを要す。「夕べの雲も」云々はゆるやかに確りとあるべし。後は「八少女の」

云々を一聲の調子にて節大きく謠ひ出し、「神さび渡れる」より位を保ちて稍重々しかるべし。「不思議や」云々は弛みなきやう乘つて謠ふ。「神樂催馬樂とり〳〵に」云々は少し靜めて出、以下寛やかに謠ひ續け、「天つ御空の」云々を乘らず進み、「天地の兩燈あらはれて」より勢よく健やかに乘つて謠ふ。「かくて夜もはや」云々は稍靜に確りと附け、「龍神湖水の」より位を進め、「明け行く空も」にて鎭めて謠ひ納むべし。

辭解

當今 當代今上の意。其時代の聖上。**白髭明神** 近江國比良山の麓、滋賀郡小松村の北界、大字鵜川の明神埼にあり。松屋叢書に「白髭明神は比良明神の一名なり、正體は猿田彦神にて（中略）本地は不動明王なり」。**靈神** 靈驗あらたなる神 **九重** 帝都 **花園** 天智天皇の時に造られし遊覽地の跡といふ。近江の名勝。**志賀の山越** 京都北白川より如意の峰越しに志賀へ出づる道、如意越ともいふ。**眞野の入江** 金葉集に「鶉なく眞野の入江の濱風に」云々。今の眞野村の邊古へ入江ありしも今は埋れて田地となれりといふ。**鴉の海** 琵琶湖畔 **波も白髭** 波の白きを白髭にかく **釣のいとなみ** 釣の糸を業の意なる營みに掛く **隙も波間** 漁業の忙しくて暇無きを波にかく。**渡りかねたる** 蜑小舟にて水上を渡ると、漁業にて浮世を渡るとを兼ぬ。**風歸帆を送る** 云々詩句なるべきも未だ曲據を知らず。**程** みち のり **舟子** 舟人 **霞の衣** 云々霞を衣に譬へ、衣の綻ぶを花のほころぶにかく。**花さそふ** 云々新古今集の歌。末句「跡見ゆるまで」 **比良** 近江國滋賀郡にあり。國中最高の山。**浦わつぎ** 空行く鴈。越路は北越の途々。此附近より琵琶湖越に越路へかけての山々の見渡さるとなり。それを云はんとて鴈を出す。玉葉集の歌に「霧わけて秋は越路の天つ鴈歸る雲居もまた霞むなり」。**天つ鴈** **御代に近江** 値ふを近江にかく **瑞垣の** 久しに冠する枕詞なるを、茲には直に久しき意に用ふ。**心も波小舟** 云々我は心も無きといふを波小舟にかく **夫れ此國の起り** 云々以下クセ前まで、全文太平記卷十八比叡山開闢の事より取る。**第九の減劫** 云々佛教にて算數の及ばざる長大の年月を劫といふ。而して此世界の成立より破壞に至る時期を成住壞空の四期四劫に分ち、世界の空間より漸次成立する期間を成劫、成立せる世界の住持する期間を住劫、漸次壞滅する期間を壞劫、壞滅し盡して空虛となる期間を空劫といへり。此住劫の中、最初人壽八萬四千歲より百年毎に人壽一歲づゝを增して八萬四千歲に達するまでを一增劫と云ひ、一減劫と一增劫とを合せて一小劫と稱し、小劫を二十回反覆するを中劫と稱せり。此には此第九回目の小劫中の減劫に於て人壽二萬歲まで減せし時に迦葉佛出世し、當時釋迦牟尼佛未だ都卒天に住したりとなり。**迦葉世尊** 佛教に過去七佛といふ中の第六佛、即ち釋迦の前に出世せし佛。世尊とは佛を尊みていふ稱。佛十號の一。**西天** 西方にある天竺國の意。印度をいふ。**大聖** 最大なる聖人の意佛を尊びていふ。**釋尊** 釋迦牟尼世尊の略。釋迦は種族の稱。牟尼は名。世尊は尊稱。**授記** 記別を授くるの意にて佛が其弟子の將來を豫言すること。迦葉佛、人壽百歲の時に至らば釋迦出世して成佛すべしと豫言したるが、釋迦は其豫告を受けて其時期の來る迄都卒天に待ち居たりきとなり。**都卒天** 佛說欲界に六天ある中第四重の天なり。之に內院外院あり。其內院に菩薩の最後身住すと說かる。**八相成道** 佛が此世に出現するに八種の相を示す意。成道は八相中の一なれども最も主要なれば其名を特出す。八相とは降都率、託胎、出生、出家、降魔、成道、轉法輪、入涅槃。**南贍部洲** 南閻浮提ともいふ。もと想像上の地理的名稱にて須彌山の南方の海中にある洲の名なれども、後廣く此世界の意に用ひらる。**一切衆生** 云々涅槃經の文。すべての衆生には悉く佛となるべき性能種子を具有す、如來卽ち佛は法界の眞理を證得したるものなれば常住にして異變改易あることなしとの意。太平記には「一切衆生悉有佛性、如來常住無有變易」と立つ浪の音あり」。**大宮權現** 日吉神社の別號。比叡山の麓坂本村にあり。比叡山の守護神なり。明治維新の際大宮權現の稱を去り官幣大社に列せり。**波止土濃** 大宮の前なる板橋を指す。欄干ある閣道なれば橋殿といふ。之を波止りて土こまやかなりなどいふは例の牽强附會の俗說なり。**其後人壽百歲の時** 云々こゝまでは凡て太平記の文に從ひ、クセの一章は凡て曾我物語卷六比叡山始の事の文を用ひて謠とせり。人壽百歲は前に解ける第九減劫の人壽次第に減じて百歲となりし時の意。**悉達** 釋迦牟尼の出家以前に於ける名。詳しくは薩婆悉達多。**八十年の春** 釋迦入滅は其八十歲の二月十五日なるをさしていふ。此年齡は方等泥洹經には七十九、天台玄義には八十二とせり。**頭北面西** 云々頭を北方に、面を西方に向け、右脇をば牀席に著けて臥するをいふ。佛入滅の時の臥法なり。**跋提** 尸賴拏跋提河の略。釋迦此河の邊なる林中にて入滅したれば跋提の波と消え給ふといふ。**佛は常住** 云々佛の肉身は跋提河邊に

入滅したれども靈は常住不滅にして周遍法界の妙體なれば何の處にも化現するを得となり。今比叡の山麓琵琶湖畔に來れるをいふ。**中津國** 日本の古名、豐葦原中津國の略。**鷓草葺不合尊** 彦火々出見尊の御子。母は豐玉姫。**妙事** 曾我物語の文字に從ふ。原書にてはもと「たへなることと」讀みしなるべし。**比叡山** 山城近江の兩國に跨る山。延曆寺の在所。京都を距る東北三里半。**佛法結界の地** 結界とは一定の地域を區劃して制限すること。密教にては一定の地域に魔障を入れざる爲之を結護する修法あり。茲には叡山を以て諸魔の近接妨害する能はざる佛法修行の淸淨安穩なる場處となさんとなり。**寂光土** 常寂光土の略。法身如來の住する眞常究竟の國土。**淨瑠璃世界** 藥師如來の在る淨土。其淸淨なること瑠璃の如くなるより名づく。**藥師** 詳くは藥師淨瑠璃光如來。東方淨瑠璃國の敎主にして十二の誓願を起し衆生の病災を救ひ佛果に到らしめんとする佛。**後五百歲** 佛入滅後の佛法流布の狀態に就きて五百年を一時期とし、五時期を劃して五五百年といふ中、最後卽ち第五の五百年には佛法隱沒して修行する者なく鬪諍を事とすべしと說かれたる其五百歲を後五百歲といふ。**われも此山の主** 「主」字、元和卯月本には「王」とあり。昔は「王」と謠ひしものか。曾我物語は「守護」なれども、太平記には「王」に作れり。**一佛東西に** 藥師は東方に、釋迦は西方に。**天燈龍燈** 天女と龍神との捧ぐる燈明。**八少女** 八人の舞姫。**宜禰** 神に仕ふる司人。きねが鼓、きねが鈴など古歌に見ゆ。**神は人の敬ふによつて** 云々古諺なるべし。卷絹の謠には「それ神は人の敬ふによつて威を增し、人は神の加護によれり」とあり。**神樂** 上古より傳りて神事に奏する樂。**催馬樂** 里巷の歌謠を唐樂によりて曲譜を作り、遂に儀式宴席等の餘興に用ひしもの。**絲竹** 絃樂と管樂と。**善哉々々** 讃賞歡喜の詞

裝束附

前シテ（漁翁）
面朝倉尉又は笑尉、尉髮、襟淺黃、着附小格子厚板、白大口、又無しにも、茶袈水衣、緞子腰帶、扇、釣棹。

後シテ（白髭明神）
面鼻瘤惡尉又は茗荷惡尉、白垂、烏甲、白地金緞鉢卷、襟淺黃、着附段厚板、半切、白地又は茶地狩衣、紋附腰帶、神扇。

前ツレ（漁夫）
着附無地熨斗目、襟赤、白大口又無しにも、淺黃縷水衣、紋附腰帶、扇、釣棹。

後ツレ（天女）謠無し
面連面、黑垂、天冠、鉢卷、襟赤、着附摺箔、白大口又色大口にも、長絹又舞衣にも、縫紋腰帶、扇、天灯持つ。

後ツレ（龍神）謠無し
面黑髭、赤頭、輪冠龍戴、赤地金緞鉢卷、襟紺の類、着附段厚板、半切、法被、紋附腰帶、打杖、龍灯持つ。

ワキ（敕使）
大臣烏帽子赤上頭掛、着附厚板、白大口、袷狩衣、紋附腰帶、扇。

ワキツレ（從者二人）
大臣烏帽子萠黃上頭掛、着附厚板、白大口、赤袷狩衣、紋附腰帶、扇。

脇能

白髭（シラヒゲ）

三月

前ヅレ 漁夫
後ヅレ 天女
後ヅレ 龍神（謡ナシ）
シテ 白髭明神（前ハ漁翁）
ワキ 敕使

ワキ次第上（清ラカニ唯カリ）

（三人）ツヨク（拍子合）君と神との道まぐり。君と神との道まぐり。

ト

ヨロボシ

ウケ

ツヨク

まぐり。治まる國ぞ久しき

ワキ

ノリ（健カニ）

ノリ

當今（トオギン）よ仕へ奉る君ぞ。

髭の明神（ミヤウジン）ハ。靈神（レイシン）にぞ座ス。君此程

不思議の御靈夢（レイム）の告（ツゲ）まましよ

より。急ぎ糸詣申せその宣旨（センジ）を被（コウム）り。

唯今白鬚の明神に勅使に未詣仕候とも

唯今白鬚の明神に。勅使に未詣仕候

道行上

九重の。空も長閑けき春の色。空も長閑けき春の色。霞む行くへハ花園の。志賀の山越うち過ぎて。真野の入江の道すがら。鳰の浦風さえかへり。立ちよる波も白鬚の。宮居に早く着きにけり宮居に早く着きにけり

シテツレ上 真ノ一声

釣の營みいつまでか。隙も波間に明け暮れん

ツレ 棹さしなるゝ海小舟。渡りかねたる浮世かな

シテサシ上 風帰帆を送る萬里の程。江天渺々として水光平らかなり。舟子ハ解くこれ明朝の雨。面白や頃しも今ハ春の空。霞の衣ほころびて。峯白妙に咲く花の。嵐も匂ふ日影かな

コト　ヒヤリ　下歌中（確カニ覚クリ上）

かな　切　賤しき海士の心まで春こそ

（シヅメル）　上歌（朗ラカニ揚ゲ上ル）

長閑けかりけれ　切ヤ　花誘ふ比良の山

風吹きよけり。切　比良の山風吹きよけり。

曹きぎ行く舟の跡見ゆる。鳥の甫わも

（シヅメル）　（前ヨリ連ヒテ）

畠とと。霞み渡りて天つ雁。切　帰る越路

の山までも。眺めよつづく。氣色かな眺め

（シヅメル）　ヲ切（穏健ニ）

よつづく氣色かな。　いろよこれなる翁。

汝い此浦の者ぞ　シテ（落著ク確カリ）　さんぬ此浦の漁夫

なそいぬ。朝な朝な沖より出で。釣を垂れ。

まづ海人姿を見奉れば。此あたりなてい

見馴れ申さぬ者なり。も　都より

ワキ（素直ニサラリ）

の使ぞ。諸りなて使ぞいろ　げによく見て

あるものかな。これい當人なり。仕へ奉る

シンカ

臣下なるぞ。君此程不思議の御霊夢の

申告まうしまをすより。報使よ。系詣申し
てゝ（シテ）（嚴ウニドウシリ）ありがたや君をしてだよりおほど
まで。敬ひ給ふ（オンガミ）神の。威光（クワウ）の程こそ
ありがたけれ。（シテ二人上（健カニ運ビヨク））賤（イヤ）しき海士の此身（ミ）ま
でも。（柏子不句）まぐるる代（ヨ）よ。江（エ）の海の深き
恵を頼むありがたや（シテ二人上（健カニサラリ））げに誰（タレ）とても君と
仰ぎ。神（シン）を敬ふ心あらば。なぞ恵（メグミ）あづ

他上秋（健カニドウシリ）
（柏子合）
からぎらん（シテ（ドウシリ上））珠さらこそ（ワキ（確カリ））處から
瑞垣の。年も経（ヘ）よけり白髭の。年（新切）も
経よけり白髭の。神の誓ひ入（ヤス）ことも。
（聊カ・ヒヅメテ）
変らぬ（ヤス）ぎりけり。げにありがたや頼もしや。
（前ヨリサラリ）
われ心も波小舟。釣の翁の身なれ
らも。安くたのしむ此時よ。生（オ）しる身は。
ありがたや生（オ）れる身はありがたや

クリ上（健カニ引キテ）
行掛
それ上國のおこり家より傳へる所。おの
（柏子不合）
おの別あり。その說まちまちなりと
いへども。暫らく記する所の一義によらば。
天地既に分つて後。第九の減劫人壽
二萬歲の時
●サシクセ獨吟
●加葉世尊兩天より
（前ノ承ケテ運ビヨク）地
出世し給ふとき大聖釋尊其授
記を得て。兜率天より住し給ひしが

シテ上（オウトリト）
われ相成道の後。遺教流布の地
（前ニ戻シテ）地
どれの處ならんと思ひ。此南膽
部洲を普く飛行して賢聖をもとめ
漫々たる大海のよう。一切衆生惡有
佛性如來。常住無有變易の波の聲。
一葉の蘆に凝り固まつて。一つの島
とある。今の大宮權現の橋殿なり
行切

地拍子
右脇脇

クセト（極メテドウシリ）

（拍子合）其後人壽百歳の時、悉達と生れ給ひて、八十年の春の頃、頭は面西右脇脇抜提の波と消え給へども、佛の常住不滅法界の。妙體ぞ昔蘆の葉の島とおりし中つ國を居賢ぞ、るよ晴ハ鸚草。葦不合の尊の古代おれが佛法の妙事を人知らぬ愛よ此巖

山の樒さ波や。志賀の浦のほとりよ。釣を垂る老翁おり。釋尊われよ向て。翁も。此地のたらば此山をわれよ與へよ。佛法結界の地をもべて宣へ。翁答へて申やうわれ人壽。六千歳の姿より。此山の主として。此湖の七度まで蘆原よりしを。

地拍子 かみおくや。トモ
又拍子扱 かみおく(ヤ)

所よ見たりし翁あり。但し此地結界と
なるならバ釣する所失せぬべしと深く
惜み申せバ。釋尊力なく今ハ寂光土よ。
帰らんとし給へバ　時よ東方より
浄瑠璃世界の主藥師忽然と出で
給ひて善きかなや。釋尊この地よ佛
法を弘め給ハん事よわれ人壽二萬

地拍子 はや。(ヤア)トモ

歳の昔より此處の主たれど。老翁
いまだわれを知らず。何ぞ此山を惜み
申すべきはや開闢し給へわれも此山の
主となつて。共よ後五百歳の佛法を
守るべしと。固く誓約し給ひて。二佛
東西よ去り給ふ。其時の翁も今の白
髭の神とかや。不思議なりとよかほど

ゆきんそて トモ

まで。妙なる神祕を語る翁の。其名ハ
いうよおぼつかなし。今ハ何をかつゝむ
べき。其いうへも釣を垂れし翁なるゞ。
勅使を慰め申さんとそ。唯今こゝよ
来りたり。ことさら今宵ハ天燈龍燈。
神前に来現の時節なれバ。暫らく
待たせ給へべしと（拍子合）みべの雲も立ち

騒ぎ。みべの雲も立ち騒ぎ。ゆゝしく落ち
来る風の音老の波も寄り来る。釣の
翁と見えつるゞ。われ白髭の神そとて
玉の扉を推し開き社壇に入らせ給
ひけり社壇に入らせ給ひけり 来序中入

出端（謡掛）（拍子不合）
上（朗カニ大キク）
ハヤ女の。返さ（位）袂の色こそ。宜禰ゞ鼓
も聲澄みて。神さび渡れるかりから

（荘重ニドッシリト）長正

後シテ上

かな　神ハ人の数よりよりて威を
増さ。まってやこれ（静ニ地ニナク）の使ひぎても
猶餘りあり　地上歌　不思議や社壇の内
（拍子合）不思議や社壇の内よりも。眞よ
打込打返（キリ）
打上（キリ）
りも。不思議や社壇の内よりも眞よ
打込打返（キリ）
打上（キリ）
打なる声を出し。扉もおのづから。
朱の玉垣やさ渡る。白髭の神の
（シテ）（拍子外ス）（ロ）（健カニサラリ）
ロ　キカん上
（キリ）
姿現れたり
打上（拍子不合）
あらありがたの所

事やなる奇特よ達よ事も。唯これ
（シテ）（最カニサラリ）
君の御蔭ぞと感涙袖を濡せり　ポ　いざ
いざさらば夜もまどろから。舞楽の曲を奏
（静ニ確カリ）
地上歌
して。教使を慰め申さんと　神楽
（寛ヤカニ確カリト）（拍子合）
催馬楽とりぐ。神楽催馬楽とり
打切
どりよ。京竹の笛　祝曲を畫。拍子
（シテ）
を揃へて夜遊の舞楽ありがたや

シテ中（静ニ確カリ）（拍子合）樂 打上刻返

地中（前ヲ承ケテ確カリト）

面白や此舞樂の。

中ニ代ヲ入

地拍子

松風ハ響を調め。心耳を澄ますなり。

上（勇健ニ位急ニ）

琴を調め。心耳を澄ますなり。

鼓ハおのづから響うつぼの聲。松風ハ

（拍子不合）

天つ市空の雲居やき渡り。湖水の

出端ニテ天女出デ早苗ニテ龍神出デ

上歌（健カニ勢ヨク）

面鳥動きそふ。天燈龍燈の来現やや

打上打返

（拍子合ノ九）

天地の兩燈現れ。天地の兩燈現

打上打返

れて。神前に供ふる。燈の光。山河

●獨吟

×舞働ノ間天女モ亦共ニ舞フ

他（静ニ確カリト）

草木赫き渡り。日夜の勝景見えざり

（拍子外ス）

けり

龍神×舞働

シテ中（健カニ寛クリト）

（拍子合ノ九）

打上打返

かくて夜もはや明方の

かくて夜もはや明方なれば。おのく

明神より暇申し。帰れば明神も

聲をあげて。善哉善哉と感じ給へば

（位急ニ進メテ）

天女ハ天路より立ち帰れば。龍神ハ湖

水の上より翔て。波を返し。雲を穿ち

て天地を別れて飛び去り行けば。明け
行く空も白髪の。明け行く空も白髪
の神風。(キアー)まる代とぞ。(ヨウ)ありよける。

盛久

解題 平家の臣主馬盛久、観音信仰の利益によりて死を免れたることを作れり。長門本平家物語、又は其類本に據りたる作なり。申樂談儀の後人の記入に永正十一年十月南都雨喜びの能に演せられしこと見ゆ。禪鳳習道目錄にも曲名あり。言繼卿記には守久の字を當つ。二百十番謠目錄に元雅作、能本作者註文に世阿彌作とあれども明ならず。廢曲に此前篇とも見るべき生捕盛久あり。

能之小書 恐(こわ)之舞といふあり。

謠ひ方梗概 大體位靜にして沈み勝ちなるも、底に充分の强み有りて確りと雄々しかるべく、心持緩急等處に應じて變化多く、節も複雜にして扱ひ易からざるもの少からざれば、其心して稽古し、相應の練磨を積むを要す。

シテ 確乎たる信仰を持し、從容死に臨む盛久の沈毅なる風丰を謠ひ表すべし。初の**ワキとの**問答は聊か沈痛の氣を帶びて然も綽然と言ひ、一息の間をとりて殊勝にサシを謠ひ出す。**一聲**は都の春に名殘を惜む心なればしつとりとあるべく、**ニノサシ**にて又調子を別にすらりと扱ひ、**ロンギ**は聲を下目に取りて少しも派手にならぬやう承け渡す。**三ノサシ**は心靜に人生を觀じて獨言つ處なれば心して確りと謠ひ、「かくてながらへ」と氣を更へて詞に移り、**カカル**にて本の位に戻しがつしりと止む。次の**ワキとの**問答は命旦夕に迫りながらも恐れず騷かず、未練も執着も無きやう落ち着きて確りと言ふべく、「ありがたや大慈大悲は」より懇に祈願して經文を讀むところ、最も愼ましやかに氣を籠めて扱ふ。「あら不思議や」云々は夢より覺めたる心にて、稍低く靜に言ひ、「待ちもうけたる」云々の一節は臆する氣色無くキッパリと出で、**カカル**を確りと位大きく、節扱ひ稍ゆるやかに、**ワキとの**掛合、確りと運びをつけ、「盛久やがて座に直り」云々の詞を特に泰然として强みに確りと言ふべし。「盛久も思の外なれば」は巧まずに出でゝ然も輕くならぬやう、以下掛合は順次かゝつて鋭く、物著後の問答は穩やかに應ふ。**クリ**は强くさらりめに、**サシ**は確りとして稍ゆるやかなるが宜しく、クセの上端は大らかなるべし。**ロンギ**は前と心持を更へて雄々しく寛りと受け渡し、「ありがたし〳〵」云々は爽やかに

言ひて勇み立つ心ながらあらはには出さず、「長居は恐あり」の一句を締めてがつしりと謠ふ。

ワキ 位輕からぬやう確りとあるべし。警固の士なれども毫もかたくなる心無く、卻て深き同情を有する體にもてなすべく、シテとの連吟に經文を讀むあたりは特に意を留めてシテに合せて慎重なるべく、「武士前後をかこみつゝ」よりはズカ〳〵と謠ひ、物著後「いかに盛久」云々の詞ははつきりと扱ひ、又「いかに盛久。盛久は」云々は荒くならぬやう確りと言ふが宜し。ワキツレ(太刀取)は總じて輕きやうに扱ふ。

地 初の「歸る春なき名殘かな」は承けてシテよりも引き立てめに附け、「たきつ心を」亦同じく、「思はざる外の」より、下歌、上歌へかけ、道行とはいへシテの感慨をも謠ひ表すなれば餘り浮き〳〵と乘りて謠はぬやう、何となくしめやぎたる處あるが宜し。ロンギは前よりも少し引き立つれども派手になるべからず。「此文の如くんば」云々は更へてゆるやかに確りと出、上歌は高からぬやう靜に、締まりよく、順次どんよりと扱ふ。此間にシテ夢見る心なればなり。次第は別に出て靜にどつしりと謠ひ、「經文あらたに」云々は手堅くさらりめに出で、「御經や」と少し鎮め、「やがて此由」より位を聊か進ましむ。「過去久遠」の云々は前を承けて强くさらりと、以下變りなく、クセも運びの粘らぬやうすらりとあるべきも、些も輕々となるべからず。ロンギは稍引き立てゝ扱ひ、「命は千秋萬歲の」より晴れやかに、キリは運びよく爽かなるべし。

辭解

盛久 平家亡びし後、主馬入道盛國が末子八郎左衛門盛久、越中次郎兵衛盛次、惡七兵衛景清等宗徒の者共、源家の目を竊みて諸所に隱れ居たるうち、盛久は下女の告訴によりて捕へられ、關東に召し下されて由井が濱に斬られんとしたるが、清水觀音の利生によりて一命助かり、本領を返し賜はりたるのみか、越前池田の庄をも賜はりたること長門本平家物語に悉しく出づ。此曲はこれに依りたるものなり。但盛久の事は此長門本以外に見當らず。曲舞の東國下(現觀世流番外、三曲のうち)は盛久の東下りの道行を作りたるものにて、本曲にはそれより借りたる辭句多し。

土屋殿 土肥次郎實平の弟、土屋三郎宗遠。

清水 京都市東山五條坂上、こゝに音羽山清水寺あり。本尊は觀世音菩薩。

南無 梵語、歸命と譯す。佛菩薩に向つて救濟を求むる意。「南無や」より「猶頼みあり」まで三井寺と同文なり。

大慈 仁愛の廣大なること。

大悲 慈悲の德を司る菩薩。

觀世音 慈悲の德を司る菩薩。

さしも草 新古今集に出でたる清水觀音の歌に「なほ頼めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらん限は」。さしも草は遂の異稱にてさしもの序辭なり。

さしも畏き あれ程までに尊きて佛緣を結ぶことの久しきをや、などか御利益なからんとの意なり。

いつか又 云々 何時か又來りて清水寺の花盛を眺め得らるべき、再會の期なき別離ぞとなり。き(來)を清水にかけ、花盛を承けて春と應ず。

音に立てぬ 云々 聲に出して言はねどもたぎつ心(わきたつ思ひ)は人知るまじとの意。音を音羽山と重ね、音羽の瀧をたぎつ心に掛く、音羽の瀧は清水寺の南崖にあり。

せば 云々 古今集の素性法師の歌。下の句「都ぞ春の錦なりける」の錦を點じ來り衣し錦還し鄕の故事に據りて故鄕の空と續く。

一稱一念 云々 觀音の御名を一度稱へ一度念ずるだに猶利益ありといふなるに、まして年來觀音を尊信しふを白河に掛く。白河は比叡山の南、志賀越より出で白川村に至り南禪寺の西より右折して賀茂川に入る川。

弓馬の家 武士の家

跡白河 跡をも知らずといひ

松坂 誰を待つを松坂に掛く。山城國宇治郡山科村日ノ岡の坂路の一。

見渡原 四の宮は山科村の大字。溪水北より過ぐ、櫃川の源にして此邊四宮河原の稱あり。

四の宮河 粟田口十禪師辻(此稱今無し)かともいへど詳ならず。

逢坂 大津市の南の坂、今は近江の國に屬す。日本最古の關ありしなり。盛久捕はれの身なれば關守もよも留めじといふ。

これや此 云々 後撰集の蟬丸の歌

勢田の長橋 琵琶湖の水、粟田郡瀨田村にてせばまり南に決するを勢田川といひ、此川に架して東海道に通ずる橋を勢田の長橋といふ。

鏡山 近江の蒲生野洲甲賀三郡の交界にある山。古、山北に鏡驛といふがあり。今の鏡山村。光悅本(慶長版謠本)には「立ちよる影も鏡山」とあり。衰へて鏡に映る身のかゞめるを鏡に云ひかけたるなり。とて地名に云ひ掛く。「衰へは」は原作「衰へば」なるべし。

美濃、尾張 身の終りに通はす

老曾の森 同國蒲生郡老曾村の森。さほどまだ年は取らねど囚人の身の衰へて老人の如くなれり

熱田 尾張國愛知郡、もと東海道の一要驛。今は名古屋市に合併して同市の南區となれり。

鳴海潟 今は尾張國愛知郡の町。和歌の名所にして昔は海濱なりしが、年緒を經るに從ひ干潟となりて今は海岸より一里餘を距つるに至れり。茲にも回れば野邊となるといふを鳴海に掛けたれば、當時既に海岸を距りたるなるべし。

八橋 三河國碧海郡知立町の大字。杜若の古跡。今は東海道を北に距る七町なれど往古の官道は尾張の村山より境川を越えこゝに出でしものなり。

高師山 三河遠江の國界に

跨る丘陵。茲を東に下れば濱名湖なり。東國下に「山は高師の名のみして野里に道やつくるらん」。**汐見坂** 遠江國濱名郡白須賀町の東南なる坂路。南に大洋、東北に富士を望み、古來眺望を以て名あり。東國下に「波の滿干の汐見坂、兩崖天に連れり、雲に漕ぎ入る沖つ舟」云々。**橋本の濱名の橋** 同郡新居町大字濱名の舊稱を橋本といふ。こゝに濱名の橋を架したればなり。元慶八年に濱名湖に始めて長五十六丈の橋を架けたること三代實錄に見えたり。後幾度か海嘯の爲地形變じて湖海相通じ遂に今日の如くなれり。**旅衣** 云々 新古今集の西行の歌「年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」を改作し、旅衣の緣語なる着(き)を來てに掛く。**小夜の中山** 遠江國小笠榛原二郡の交界、東海道日坂、金谷二驛の中間なる坂路。正しくは「さやの中山」。**大井川** 遠江駿河の國境にある大川。此川は古來幾度か其流域變遷するを以て變る淵瀨といへり。**宇津の山** 駿河國安倍志太二郡の界嶺東海道丸子岡部二驛の間、波も打つを宇津に掛く。**清見潟、三保の入海** 古清見の關あり、關に來(き)を清見に掛く。駿河國庵原郡興津の清見崎と安倍郡三保崎(三保の松原)との間なる海灣を清見潟といふ。其南は三保の入海卽ち今の清水港なり。**田子の浦** 同國富士郡元吉原村邊の海濱をいふ。吉田博士地名辭書には庵原郡蒲原町の內なる吹上の邊を正しとすといへり。山部赤人の田子の浦の名吟を引きて雪の富士の嶺とつゞく。**明けゆくや箱根山を承けて箱の明くるを夜の明くるにかく。** **星月夜** 鎌倉山の枕詞。正しくは「ほしづく夜」。**鎌倉** 相模國鎌倉郡にあり。頼朝の幕府を開きし處。**百年の榮華** 云々 樂天の「百年富貴夢中事、一旦榮華風前塵」より脫化せしものか。**かゝる身** 鎌倉山の雲霞のかゝるを斯る身に掛く。**御下向** 都より地方へ向ひ行くをいふ。こゝには鎌倉へ到着せしことをさす。**披露** 公に發表すること **最期** 命終の期 **なからん跡** 死後 **回向** こゝには死後一遍の念佛を手向けて冥福を祈ること。**二世** 今世と來世、**彼御經** 觀音の妙力功德を說ける法華經第二十五の普門品を指す。**薩埵の悲願** 薩埵は菩提薩埵の略。觀音を指す。惠心の佛心法要に「十方三世の諸佛の大悲を集めて觀世音菩薩の體とす」 **定業亦能轉** 前世の業因によりて此世に受くることの定れる業報も觀音の妙力によつて轉じ換ふるを得とのこと。**無緣の慈悲** 無緣は佛心に所緣なきの義。佛陀の慈悲任運自然に衆生を濟度し得るをいふ。**今生の利益** 云々 若し現在此世に利益なくば誰も來世に善所(淨土)に生るゝ事を願ふものあるまじ、現當二世の希望空しく徒ら事とならば大聖觀世音の誓願なるものまた僞りにあらずやとの意。後生前處の語、法華經に出づ。**或遭王難苦** 云々 普門品に出づ。訓讀せば「或は王難の苦に遭ひて刑に臨みて壽終らんと欲せんに彼の觀音の力を念せば刀尋いで段々に壞(を)れん」。**衆怨悉退散** 普門品に出づ。觀音力を念せば もろ〳〵の怨敵悉く退散せん。**種々諸惡趣** 云々 同じく普門品にあり。「種々の諸惡趣、地獄(餓)鬼畜生、生老病死の苦、以て漸く悉く滅せしむ」と訓む。**夕露の命** 有難しといふを夕露にかけ、はかなき命を譬へて露の命と續く。**昔在靈山** 云々 昔在靈山名法華、今在西方名阿彌陀婆婆示現觀世音、三世利益同一體」の偈文に據る。此偈は南岳大師の作と傳ふれども其著書に見えず。後世天台宗の僧の假托せしものならんといふ。惠心の佛心法要には「極樂稱爲無量壽、婆婆示現觀世音」の句あり。**終の道** 死ぬること。**八聲の鳥** 曉の鷄をさしていふ。**金泥の御經** 紺紙に金字にて書きたる經 **念ひの玉の緒** 數珠を念へば、念ひの珠と分け、命の意なる魂の緒に云ひかく。**牢より牢** 云々 牢より引出して囚人を送る牢輿に乘せしむ。**由比の汀** 鎌倉町の南海濱、およそ稻瀨川滑川の間をいふ。**坐敷** 坐席の意。現時通用語の座敷にあらず。**座に直り** 首の座に著席すること **太刀取** 首切役。長門本平家物語には土屋三郎宗遠が太刀取なり。**鎌倉殿、御前** 共に賴朝を指す。**不取正覺の御誓** 彌陀の四十八願各其終りに不取正覺の語あり。其意立つる所の誓願若し成就せずば正覺の果位に入らじと誓へるなり。佛心法要に觀音の誓願を說いて、「一切衆生を悉く成佛せしめ畢て後吾當に成佛すべし、若し一人も殘りては正覺を取らじ」と、又往生要集に「觀世音菩薩言、衆生有レ苦、三稱二我名一、不二往救一者、不レ取二正覺一(弘猛海慧經)とあり。**初夜** 云々 晝夜六時の分け方にて初夜は午後八時頃、後夜は午前四時頃、一點は其一時を五に分ちたる第一點。**蕭然** 靜かに、寂しく。**六窓** 六窓一猿の譬喩とて眼耳鼻舌身意の六根を六窓に喩へたる詞あり。こゝには意識の漠然として明かならざる意を含みて窓牖のまだ昏きをいふにや。給園抄には夜の明け六つに掛くといへり。**耿然** あかるきさま **八旬** 八十歲。**香染の袈裟** 香衣のこと。

香染は木蘭とて黄に黑みを帶びたる色、もと乾陀羅といへる香木の汁を取りて染むるに依る。香衣は我國にて勅許の色衣、但し其色は宗派に依りて異同あり。袈裟は僧の着する三衣の總稱。**鳩の杖** 頭部に鳩の形を刻みたる杖。老人の用ふるもの。宮庭にて老人に賜はりしは此杖なり。**妙文** 妙音の誤なるべし **譜代の侍** 累代の家臣。東國下に「抑この盛久と申すは平家譜代の侍、武略の達者たりしかば鎌倉殿迄で知し召したる兵なり」。**小松殿** 平重盛。拾葉抄に引きたる琵琶法師の平家物語に「小松殿熊野參詣に櫛笥盛久御供して、今様など舞ひかなで興を催しける」云々。**人の國** 外國**唐が原** 相模國片瀬川の東の原。夫木抄に「名にしおはゞ虎や臥すらん東野にありといふなる唐が原」。**鶴が岡** 千秋の鶴を鶴が岡に掛け、岡の松と續く。鶴が岡は鎌倉雪の下、八幡宮の所在地。**松の葉** 云々 古今集の序に「松の葉の散り失せずして、まさきの葛長く傳はり」とあるを引く。松の葉は散失せずの序、正木の葛は長きの序、長くを長居に轉ず。

裝束附

シテ（平盛久）
襟淺黄又白にも、着附無色厚板、白大口、水衣、掛絡、紋附腰帶、水晶珠數、經（懷中）。

ワキ（土屋三郎）
物着に、梨打烏帽子、白鉢卷、白大口、掛直垂、小刀、腰帶、扇。

ワキツレ（與舁二人）
梨打烏帽子、白鉢卷、着附厚板、込大口、上下直垂、小刀、扇。

ワキツレ（太刀取）
着附厚板、白大口、紋附腰帶、扇。

梨打烏帽子、白鉢卷、厚板、白大口、側次、腰帶、小刀、太刀。

四番目
又二番目

盛久（モリヒサ）

三月

シテ 盛久
ワキ 土屋三郎
ワキツレ 太刀取

シテ詞（沈痛ニオンモリト）
如何（カ）ゞ土屋殿（ドノ）よ申さべき事の。
ワキ（確カニ）
何事（コト）ぞ。シテ（靜ニ底カアリテ）唯今陶東（クダ）よりなり。
ワキ
それ限（カギリ）なるべし。清水（キヨミヅ）の方へ輿（コシ）を立てて
給たりけへ。
ワキ（確カニスラリ）
それこそ易（ヤス）きほど事。如何（イカ）
シテサシ上（殊勝ニ淚ヽ）
ヨワク（柏子千合）
よ面目（メンモク）。東山（ヒガシヤマ）の方へ輿を立てられけへ。
南無や大悲大悲の觀世音さても草。

さしも畏き誓の末。一稱一念猶頼み
ありまして。年来遇のほ結縁
空しからんや。あらまほし名殘惜しや
いつか又清水寺の花盛（一セイ上）（気ヲカヘテシカトウリ）（地）（前ヲ受ケテ）
名殘惜しや　（地）（前ヲ受ケテタツプリト）
たきつこころを。人知らじ　（打上）
柳櫻をこきまぜて。錦と見る故郷
帰る春なき。
音羽山　（調子ヲ別ニスラリ）
見渡せば

の空　（地）（前ヲ受ケテ運ビヨク）
いつかいとと思出の。限あるべき
東路と思ひ立つこそ名殘なれ　（確カニスラリ）
なまじひよ弓馬の家に生れ。せよ隱
れなき身とて　（地）（前ニ戻シテ）
思ひ立つ。の旅行
の道。角の東に赴けば。あと白河を。行く
はのいつ帰るべき。旅なれん
誰をとゝ松坂や四の宮河原四つの辻

上歌（聊シウトリト運ビヨク）

これや此。行くも。帰るも。別れては。行くも。
帰るも。別れては。知るも。知らぬも。逢坂の
関守も。今のわれをば。よも止めじ。勢田
の長橋うち渡り。立ち寄る影は鏡山。
さのみ年経ぬ身なれども。衰へ老
曽の森を過ぐるや。美濃尾張。熱田
の浦のよりの道をば。波に隠されて。

拍子板 物
命ありけり

まさしく野べに鳴海潟。又、橋や高
師山。又は橋や高師山。潮見坂。橋
本の。濱名の橋をうち渡り。旅宿
かくまで見んと思ひきや。命ありけり
小夜の中山これかとよ。変る渕瀬
の大井河。過ぎ行く波も宇津の山
越えても。関よ清見潟。三保の浦

（シテ上）（地上）（地上）（シテ）

田子の浦うち出でて見れば真白なる
雪の富士の嶺箱根山猶明け行くや
星月夜はや鎌倉よ著きよけりはや
鎌倉よつきよけり」（独ナネ合）夢の中よ道あ
って塵埃を隔つ。げよやそこも知ら
ざりし。山を越え水を渡って。此海東
よ著きぬ。百年の禁華は塵中の夢。

一寸の光陰は沙裏の金。げよや故郷は
雲居のよそ。千代もと契りし友人も。
変る世なれやわれ一人。鎌倉山の雲霞。
げよやる身の習ひや。かくてあらん
（カハル中（静ニガッシリト））
諸人よ面をさらすんより。おつとれ疾う
斬られいざやと思ひ。早付（聊カ静ニ）
盛久の獨言を作せり。（確カニ引立テ）
「あら痛やうよ申し。土屋が

来りては（落着テ確カリト）シテ土屋殿とゞや此方へぢへ
りゐへ（角立タヌヤウニ）ワキ内ト向の由を披露申して
いへば。急ぎ謀申せとのぢ事うそゐ
（穏カニ抑ヘテ）シテ唯今も獨言よ申しく如くかくてあるらん
諸人よ面をさらさんよりもあつぱれ
疾う斬られぢやとの念願。（下目ニカリテ）シテはや
（別ニ内ヘトリテ）適ひていよ。さて最期ハ唯今うそゐ

（健カニサラリ）ワキやぢ最期ハ此暁。然らぢハ明夜かと
仰せ出されていゐ（静ニコメテ）シテさてハ暫らくの時
（氣ヲ更ヘテ下目ニ確カリ）刻をそいよ。偖も此程土屋殿のぢ芳志。
申ともおろかなりよ。又無からん
（含）ナト一遍の念佛ともぢ廻向よ預からぢ。
（辞ニ確カリ）カん中ッヨク二せまでのぢ芳志たるべ。（慎重ニ氣ヲ起シテ）シテ付われ此年月
清水の觀世音を信じ。毎日かのぢ經を

怠る事勿れ。さりあづら今日は未だ讀誦
申さぬ程なれば。暇を賜はりゐへかの所
経を讀誦申したくは　半（穏健ニ）それとそおり
がたりゐへ。土屋もこれまで聽聞申さう
ぎるるそは　ありがたや大意大悲の菩薩
堪の悲願。言葉に業を能轉ハせ菩薩の直
道とかや。願ちくくは無縁の慈悲を垂れ。

われを引導すし給へ。今生の利益も
缺けば。後生善所をも誰ら頼まん。こせ
の願望も空しくば。大聖の誓約
豈虛妄ならまじや。或遭王難苦臨刑
欲壽終。念彼觀音力刀尋段々壞
半（殊勝ニ確カリ）ありがたや此経を聽聞申せば。命も
頼もしうこそゐへ　げによく聽聞

いものかな。此文といつて。假令人生難の
逆に遇ふとも。その劒戟に折れ
力尤上（健カニ強シ）
又衆怨惡退散といふ文に射る矢も
其身に立つまじければ　げに頼もしや
さりながら。命のために此文を誦せ
ずはあらじ。二人中（クヾツス（ミテ和シテ殊勝ニ））
種々諸惡趣地獄鬼畜生
生老病死苦以漸悉令滅（地下秋中ニル（ヤカニ確カリ））
此文の

●小謠

地拍子
二持ニ
立又トモ

如くば。もろくの惡趣をも三惡道に
通ずべしやありがたしとよ露の命に惜
まじ唯後生こそかなしけれ　上歌（沈重ニシテミリト）
昔在
靈山の。法華一佛。今西方の
立又。娑婆世界（前ヘ戻シテ）
の觀世音。三世の利益同じくに。かく刑
戮に逢ひ身の。誓はいとゞ深るべきや。

盛久ら後の道よも闇からで頼もしや。

シテ詞（音ヲ低メニ、シワボリト）あら不思議やみい睡眠の内よあらたなる霊夢を蒙りていいうよあらありがたやしい

ワキカケ上（健カニサラリ）既よハ聲の鳥鳴いて。

（拍子不合）ツヨク

ほ最期の時節唯今ありぱやくも

シテ詞（確カニキッパリト）出でいへてよ　待ちまうけたる事なれば。

左よハ金泥の経なれよハ念の珠の緒の。

カケ上（確カニ位大キク）命も今を限なれば。これぞ此世を門出の場よ。足弱こと立ち出づる　武士

（和心アシヨワヨワ）ツヨク

（ハルト）ワキカケ上（健カニ淀マズ）

前後をせとみつ。これぞ別の鳥の聲

シテ（落着アリテ）ワキ（サラリ）

鐘も聞うる東雲より　ワキ（独ミナク）

（確カリ）シテ

興よ乗せ　由比の浦よ　急ぎけり

地次第上（静ニドッシリト）

（拍子合）夢の路を出づる曙や。夢路を出づる曙や

ワキカケ上（静ニサラリ）

後のせの門出あるらん　（独チ不合）

シテ由比の

行よ著きしかば。座敷を定め敷皮敷せ。
はやく直らせ給へ、（シテ）「盛久（泰然トシテ底強ク）」やがて
座より直り。清水の方かぞ拜たぞと。西よ向
ひて。（ワキヅレ上（健カニ淀ミナクズカズカト））「観音の。古名を唱へて。待ちけれが
太刀取後よりまとうつて。稱念の聲の
下よりも。太刀振り上げ切いるよ。（地ミナク）
經の光眼よ塞ぎ。取り落なる太刀

を見れば。二つよ折れて段々となる。（カゝん上（サラリ））
そもいかなる事やらん。（シテ引（駿ガズドウシリト））「盛久も思の
外なれば。（ワキ）「たゞ茫然とおきて居たり
（ワキカゝん上（健カニサラリ））「いやく何をか疑よべき。此程讀誦の
（ワキ）「經の文（順次ニカウテ）「臨「開「法（確カリ）「壽「経を
（確カニカウテ）「念「彼「観
音力（ノンリキニシテ）「刀「尋（トオジン）
（地上（手堅ク淀マズサラリ））「段々に壞の（拍子合）經文あら
たよ量ちき劔段々よ折れよけり。（地拍子）「未せ

はさめにけり。あらありがたの御経や。やがて此由聞し召し。急ぎ御前に参れとの御使度々に重なれば。召に随ひ盛久は。鎌倉殿に参りけり鎌倉殿に参りけり」

物著 ワキ「いかに盛久御前にては。君この暁不思議なる霊夢の御告あり。盛久も若し夢や見けるその御事にては

シテ「何をか隠し申すべき。今夜不思議の霊夢を蒙りては

ワキ「さらばその霊夢のやうを御前にて真直に申し上げられ候へ

シテ「畏つては

クリ「それ不取正覚の御誓ひ今以て始めならずとも

地「過去久遠の大悲の光いつくしく不到の所ならん

シテサシ「然るにわれ此光陰を

●サシクセ獨吟
切迄囃子

頼み日夜朝暮に怠らず。かの御經
を讀誦せしに。とりわき此時節刑
戮に逢ぬべき身を思ひて。片時怠る事
もなく　初夜より後夜の一點まで　六窓
蘭然として坐したりしに
まだ明けざるに。耿然たる一天虚明なる
内に思はずも。少まどろみ給ひぬと見

能ノ時ハ
ここ、ふらり
来りたり。

えさせ給ふ老僧の。香染の袈裟を
懸け水精の珠數を爪繰り鳩の杖
にすがりつゝ。妙聞たゞしき聲にて。
われは洛陽東山の清水のあたりより
汝がために来りたり。本より大慈大悲の。
誓願なれば空しからん。唯一音あり
とても。われを念ずる時節の王難の

拍子扱
超えたり。(ヲ)とも

地拍子
「「「(持)ごー
われ泣ぎ。ヤ

シテ上(健カニ位大キク)「況や泣年月
地(前ヨリ運ビテ)「多の年
の誠を抽んで。殺心人を超えたり。心
安く思ふべーわれ泣ぎ。命を代るべーと
宣ひて夢の即ち覺めぬけり。盛久
貴く思ひて歓喜の心限り。
ロンギ上(前カ引立テ、地ミナク)
シテ上(切)「頼朝卿
これを聞しめ。此曉の夢想も同
じ告げとあらたなる信歓限り

シテ上(雄タシク寛タリト)「其時盛久が夢の覺めたる心ちして。
感涙をとめかねぬ前を罷り立ちけ
地上(健カニサラリ)「れぞ。いうよ盛久暫しとて。居簾を
シテ(確カニ地ミナク)「よげて見されば
地中(晴ヤカニ運ビテ)「せん方もなき盛
久が命は千秋萬歳の春を祝ふぞと。
シテ上(明カニ大キク)「中盃を下さるし
地上(前ヲ承ケテ力ブリト)「ぞ(拍子不合)種は千代ぞと
菊の酒
地上(前ヲ承ケテ力ブリト)「花を受けたる。袖かな

平行（角立ヲヨヤウニキヾバリト）

いうよ盛久。盛久は平家譜代の侍武略の達者。殊より乱舞堪能のよし聞しめ及ばれたり。一年小松殿北山にて茸狩の遊路の居酒宴に於て。主馬の盛久一曲一奏の事。関東まで聞隠しなし。殊更これは喜びのおとりあれば唯一さしとの居所望なり急

喜びのおとりあれば

●囃子コ・ヨリモ

おとりあれば

●仕舞

いそ仕へ（シテ（爽カニ雄々シク））ありがたし。ありがたし。得難きは時。さり難きは貴命なり。盛久かゝる時節の幸せ。せいて例あるべからぬ。（合掌中（落着アリテ位アリ））はまり靡く時なれや。天四海の内のみち。人の國まで日の本のもろこしの原もこのところ（地キリ上（拍子合）男舞打上（謡掛））酒宴半の春の興。酒宴半の春の興。雲らぬ日

地拍子

二地 松の葉の散り

影長閑にて、君を祝ふ千秋の鶴が岡の。

二地 松の葉の散り。失せぬして眞折の葛

シテ中 長居は怨みありと罷り

二地 申し仕り。退出げる盛久が。心の中ぞ

ゆゝしき。心の中ぞゆゝしき。

佛原

解題 佛御前の亡靈、加賀國佛原に現じて旅僧に讀經を乞ひ、又在りし昔の姿にて舞ひしことを作れり。春日拜殿方諸日記に寶德四年四月薪の申樂に觀世太夫が演せしこと見ゆ。能本作者註文、二百十番目錄に世阿彌の作と傳ふれども、之を證すべき古記無し。古き別名を佛御前といふ。

謠ひ方梗概 位はほゞ夕顏の類に似て總てに美しく靜なる中にも、どことなく愁を含みて寂しかるべし。

シテ 前は常の鬘物の位にて「のう〳〵あれなる御僧」と靜に大きやかに呼掛け、**ワキとの**問答は位をもちてしとやかに承け應へ、「さらば其名をあらはすべし」をさらりめに出でゝしめやかに言ひ、掛合に入りて順次少しづゝ氣を乘せ行き、連吟を確り謠ひて地へ渡す。**サシ**は優にさらりと素直に、以下亦同じく、**クセ**の上端はおつとりと謠ひ、**ロンギ**は浮き〳〵せぬやう穩やかに承け渡し、止メの「草堂の」を殊に丁寧に扱ふ。後は優しくすらりとして前程には靜めざれども、さりとて花やかになるを好まず。出の謠はサシなれば稍さらりと謠ひ出し、「遠寺の鐘も幽に響き」と締めて內へ取り、次句をむつくりと扱ひ、「嵐烈しき」を物柔かに本バリに張り、「假寢の床に」と少しかゝって、「夢ばし」云々をおつとりと謠ひ止む。「恥かしながら」云々は內へ取りて出、次第にバッキリと扱ふ。掛合は順次に詰め、「佛の舞の妙なる袖」は氣を少し更へて、一聲の調子に取り、寬りと、**ワカ**は改めて稍晴れやかに、以下の**地との**掛合は派手にならぬやう乘つて、心して謠ひ、「嵐吹く雲水の」にて平ノリに更へ、物靜に抑へてしつとりと止む。

ワキ 鬘物なれば通じて品好く、稍ゆるやかに物柔かなるを宜しとす。「不思議やな」云々の詞は、獨言のやうに言ひつゝ終にシテに問ひかくるなれば、初は稍下に取りて出で、順次に少し引き立つる心なり。待謠は少し寂しげに扱ふ。

地 初の上歌は更へてしつとりと出で、「野もせにすだく」と確り、次句を內へ取つて「山風も」より稍さらりめに、止メの返しを鎭めて浸み〴〵としたる情景を謠ひ表す。**クリ**は改めて音を少しく上に取り、確りと謠ひ、**サシ**以下は稍すらりとあるべし。**クセ**は釋敎に寄する心を旨と靜に浮かぬやうに謠ひ、されど粘らぬやうに心を附くべし。出は序の位、「花一時の」云々を少し引き立て、「常磐なり」と一旦謠ひ鎭めて、以下を破の位

にとり、上端後を稍さらりとしたる味はひに扱ふ。ロンギは更へてさらり心に承け渡し中入前を物靜に謠ひ納むべし。後はシテとの掛合を花やかに流れぬやう心しつゝ、寛やかに綺麗に扱ひ、キリも幽玄に大事に扱ひて靜に謠ひ納む。

辭解

よそは梢の 云々餘所はまだ紅葉の盛りなるに、雪の絶ゆる事無き白山を尋ねんとなり。秋深き、深き雪、雪の白といひかく。**白山** 加賀飛驒の兩國に跨れる高山。其絶頂御前嶽(一名禪定)に白山神社あり。伊弉冊尊を祀る。**禪定** 行を修するを云ふ。白山禪定は古くより行はれたる事諸書に出づ。**遙々と越の** 云々遙々と來しを越に掛け、白山知らと續を重ねて綾とす。越は加賀、能登、越前、越中、越後の總稱。古今集「君がゆくこしの白山知らねども雪のまにまに跡は尋ねむ」。**天照らす神** 雲が天に照りわたるを天照大神にいひかく。泰澄法師白山を開かんとせし時、山神天女と化現し「我は伊弉諾(冊の誤なるべし)尊なり、今妙理大菩薩と號す、天照大神は我が子なり」云々と云ひし事の元亨釋書に見えたるを胸におきて綴る。**柞** 柏に似て紅葉する木。天照大神の母なる意を含む。**誓** 紅葉ばの血しほと詠みたる歌句あれば、茲も血に掛けて出す。此山神が泰澄に「上護二一人一。下撫二萬民一」と誓ひし事元亨釋書に出づ。**佛の原** 今詳ならず。佛御前こゝの出なれば佛と名づけしにや。源平盛衰記に「六日は佛が原、金劍宮へ入れ奉る。此明神と申すは、嵯峨天皇の御宇弘仁十四年に此所に祝ひ奉りて三百五十四年也」云々。金劍宮は文明年間の廻國雜記に依りて加賀國石川郡鶴來町に近き下白山の地に在りしもの、如く思はるゝより、佛の原をも此地と推定する說あり。又越前國三國町の月窓寺は其跡なりとも傳ふ。**草堂** 草の庵。**機緣** 善根の機ありて敎法を受くる緣となること。**思ふ日** 其人を思ふ忌日。**五障三從** 云々五障は法華經提婆品に「女人の身、猶五障有り、梵天王、帝釋、魔王、轉輪聖王、佛身の五となるを得ず(譯文)。三從は孔子家語に「女子(中略)有二三從之道一、幼從二父兄一、既嫁從レ夫、夫死從レ子」。源平盛衰記に「さらでだに女人は五障三從とて罪深き御事にて侍り」ともあり。**清しき道** 淨土の譯語。狹衣物語に「このひと卷ばかりは、すゞしき道のしるべにもなしはべらん」。**佛御前** 白拍子。加賀の生れなるも京都に住し、當時妓王の清盛の寵世に時めけるをかたはら痛く思ひ、一日清盛の邸に推參して舞曲を奏し、其の妙技にいたく清盛を動かし終に妓王にかはりて嬖寵を專にせしも後妓王の和歌に感じて人生の榮枯を悟り、密に邸を遁れ出で、十七歳にて尼となりて妓王の庵室に訪れ、妓王、妓女、母刀自の三尼と共に念佛を事とし、時こそ遲速あれ、往生院に共に往生の素懷を遂げたり。**成佛の緣ある** 生前の名も佛、所も亦佛の原なれば、成佛の緣ありと云へり、成佛は佛果を成ずること。**一佛成道** 云々一頌四句の偈文。淨土宗の有情非情成佛回向文なり。「一人の佛陀成道して慈眼を以て法界を觀見すれば一切の有情非情皆成佛すとなり。**野もせにすだく** 野も狹きまでに集る。**平相國** 平清盛を指す。相國は太政大臣の唐名。**妓王、妓女** 京都堀川の白拍子姉妹。幼にして父を失ひ、一日母の病を石清水に祈る道にて清盛に知られ、母子三人西八條の邸に召され、妓王最も寵遇せられしも後に佛御前に寵を奪はれ世を憂きものにおもひて尼となり、京都西嵯峨に庵を結べり。時に妓王廿一歳、妓女十九歳、嵯峨の往生院は其跡なり。**刀自** 支那にては本來老母の樣なれども日本にては年たけたる主婦の意に用ふ。こゝには佛御前といふ心にて佛刀自と用ひたりと見ゆ。これは平家物語に「長講堂の過去帳にも、妓王、妓女、佛刀自(覺一本には、とぢ)らが尊靈と四人一所に入れられたり」とあるを誤り續けたるものにて、この引文の刀自は妓王、妓女の母なる白拍子をさすなること、同じ物語に「妓王妓女とて姉妹あり。刀自(覺一本には、とぢ)といふ白拍子が女なり」とあるにて明なり。**温顏** 柔和にして悅色ある面ざし。**玉衣** 美しき衣裳。玉は次の露の緣語。**露** 白拍子が着る水干などの袖に垂れたる括り緒。其白きを白露といひて起臥に掛く。**をやみ** 止みといふに同じ。**思ふ事** 云々「思ふこと適はねばこそうき世なれ」といふを上の句としたる歌のありしを引けるならん。未だ見當らず。**優色** すぐれて美しき意。次の「花」にかかる。**花一時の** 云々容姿と寵愛とを花の暫しの間の盛に喩ふ。**いつ歎き** 云々新古今集に「いつ歎きいつ思ふべき事なれば後の世知らで人のすぐらん」。**敎なれ** 此機會に逢ひたるは卽ち佛の導き給ふ敎なりとなり。**彌陀の御國** 阿彌陀佛の坐す極樂淨土。娑婆世界より西方に在りといふより、そなたと云ひて西山に續く。平家物語に「夕日の影の西の山の端に隱るゝを見ても、日の入り給ふ所は西方淨土にてこそあんなれ。いつかわれらもかしこに生れて、ものを思はで過さんずらんと」云々。**西山** 京都の西方の山山。**うき世の嵯峨** 「さが」は習はしの意。浮世の習はしといふを妓王が尼となり庵を結びし西嵯峨に云ひかく。平家物語の

此時の事を記せる條に「浮世の中のさがなれば」云々

眞の佛 今までは名のみ佛なりしも、今よりは心まで佛の如き人よとの意。りしより結ぶの縁語とす。

様をかへ 僧尼の姿になること。

執心 執着の心。佛御前を怨みたること、妓王の語りたる詞に見ゆ。

岩代の松 誰とか云はんの意を岩代にかく。岩代は紀伊日高郡にあり。古へ、松の葉を結びて契をかけたる風俗あり。

白雪の 云々 いづくとも知らぬ意を白雪にかく。玉葉集に「ふみわけてとはるゝ雪のあとを見て君をぞ深く神は守らん」とあるを借りたるにや。

草衣尾花が袖 草原に消えゆく姿のほのかさを草を衣とし、尾花を袖としたる如く見たてゝ綴る。

とことはに 長く。假寢の床の音を受く。

御法 こゝにては讀經。

夜もすがら 終夜

山葛 月の落ちかゝる山と續けて「かゝる」の序とする爲に葛と云ひ添へ、葛を吹き返す意を以て嵐を出し、凄涼なる夜景を叙す。

夢ばし 夢をばの意。しは意を強めたる詞。

草枕 旅のかりね。佛の原の草と續け、草枕の語に續け馴れたる「ゆふ」（結ぶ意）の音を借りて遊女を受く。

輪廻 衆生が六道に旋轉して生死極り無きを車輪に譬へたる語。こゝには再び娑婆に見え來りたるをいふ。

極樂世界 阿彌陀佛の淨土。此所に歌舞の菩薩ありて演奏を絶たずといふより、歌舞を受けて出し、更に此原の名の佛と云ひかけて、己の舞を歌舞の菩薩の舞に喩ふ。

ひとり猶 云々 一遍上人の歌「ひとり唯佛の御名やたどるらんおのゝ〳〵歸る法の場人」を更へて出す。法の場人は教法を聞く人。

前佛、後佛 佛說に此世界の生じたる初より出現せし佛を過去七佛、其最後の佛を釋迦牟尼佛とし、次で出現すべき未來の佛を、今兜卒天の內院に在りと想像せられたる彌勒菩薩とし、彌勒は釋迦の滅後五十六億七千萬年にして娑婆に現れ、釋迦の後を襲ひて人天の化益をなすべしとせられたり。今は釋迦入滅の後にして、彌勒の未だ出でざる中間の世なれば、釋迦を前佛といひ、彌勒佛を後佛といふ。

夢の中間 前佛後佛の中間にて夢の如き此世。

夢幻の一睡 盧生が邯鄲の枕に臥して一睡の中に人世を夢みたる故事を胸におきて綴る。平家物語に「娑婆の榮華は夢の夢、樂み榮えて何かせん」

佛もあるまじ 云々 平家物語に出でたる妓王の朗詠に「佛も昔は凡夫なり、われらも終には佛なり、いづれ佛性具せる身を、隔つるのみこそ悲しけれ」とあるを含み、佛なければ衆生もなしとの意を述ぶ。嵐はあらじに掛く。

天に浮かめる 古今集眞字序に「浮レ天之波起ニ於元一滴之露ニ」。大海の水も一滴の露より起り、其露を初に返し見れば終に無に歸して何物も無しとなり。返すを受けて舞の袖と續く。

一歩擧げざる 云々 一歩擧げざる前、卽ち未だ何の動作をも生せざる以前を佛といふべしとの意。佛御前が謠ひたる歌として出せるは似通ひたる小唄のありしなるべし。

裝束附

前シテ（里女）
面深井若女小面の類、鬘、鬘帶、襟白二、着附摺箔、唐織着流、鬘扇。

後シテ（佛御前）
面同前、前折烏帽子、鬘、鬘帶、襟白二、着附摺箔、緋大口紫にも、長絹。鬘扇。

ワキ（旅僧）
角帽子、着附無地熨斗目、水衣、腰帶、扇、珠數。

ワキツレ（從僧二人）
角帽子、着附無地熨斗目、水衣、腰帶、扇、珠數。

三番目

佛原（ホトケノハラ）

九月

シテ　佛御前ノ霊（前ハ里女）
ワキ　旅僧

ワキ次第上（聊カ緩ヤカニシットリト）（三人）ヨワク（拍子合）

よそは梢の秋深き。よそは梢の秋深き
雲の白山尋ねん

ワキ詞（静ニ品好ク）

これは都方より
出でたる僧にて候。われ未だ白山禅定
せざりし程に。此秋思ひ立ち白山禅定と
志して候。

道行上（朗カニ運ビヨク）（三人）（拍子合）打切ヤ

遥々と。越の白山知らざ
りし。（大キク）打切 越の白山知らざりし。そなたの雲

も天照らせ。神の御作の紅葉ぢの。御代の
色もいや高き峯に早く廻り来て
糸詣をるぞ。ありがたき糸詣をるぞ
ありがたき　ロキ（落着テ）急ぎい程よ。これはや
加賀の國佛の原とやらん申い。日の暮
れい程よ。これある草堂よりたち寄り。
一夜を明さばやと思ひい　シテ（静ニ伸ンビリト）呼掛のうく
おれある者。何と其草堂より泊
りいぞ　ロキ（聊カ下目ニトリテ）不思議やな道もなく里も
なき方より女性一人来りつれは言
葉をかけ給へ。いうなる人なそ　シテ（閑雅ニ）順次ニ引立テ
もぞ　これい此佛の原に住む女なそい。
時もなそあれ今宵も此草堂に泊
りなそ。ありがたき機縁なそ　ロキ（前ヨリ速ニテ）ませ。

日月當れり

けふ思へ日月當れり。中（濕ヤカミ）に經を讀み佛（舍）
事をなしてただ給へ。さきだつ五障（他ナネ合）
三從の此身なれば。業（マヨイ）の雲も晴れ難き。
心の水の濁（ニゴリ）をまさしく清（スズ）き道（オト）
引（ウ）道（オト）す給へ。口ヤ行（穩カミ）に經を讀み佛事（舍）を
なせと彫る。それを出家の望（ノゾミ）なれ。
さてく弔（イ）ひ申まべき。こ者は誰ぞて

おはまをそ シテ（サラリンニ出デシ）さらば其名を著（アラワ）をべし。
（濕カミ）いのへ佛法（ホトケゴ）前（ゼン）と申し、白拍子（シラビョオシ）は此國
より出でし人なり。都より舞（ブ）女（ゴ）の
興（ホマレ）せよ勝（スグ）れ給ひしが。後（ノチ）は故郷（コキョオ）を
ねがひて此國に帰り。終（ツイ）によとりて堂（ムナ）
くなる。跡のまるも此草堂の露と
消えり其跡なり

草堂のもと

ロヤカん上（徒カミ）サラリ

不思議や偖は

名所もトモ

古への其名を聞て佛ぼの前のあき跡
までも名をとめて　シテ引（順次に氣ヲ来セテ）佛の原といふ名
所も昔を留むるなれば　ワキカン上（穏カニカヽツテ）今弔
ふも慈悲あるき。成佛の縁ある其人の（合）
（閑雅ニカヽツテ）シテ名も頼もしや　ワキ（カヽツテ）佛成道　見聞法界
（抑ヘテ）シテ草木國土。悉皆成佛と聞く時
地上歌（シツトリト）佛の原の草木まで。佛の原の草木まで。
●小謡（拍子合）

皆成佛の慈悲まで。ありがたやありがたや
（雅カリナミ）野もせよもだく。中の音までも聲佛（合）
（内ヘトツテ）事やあらぬ。山風も夜嵐も。聲
（サラリメシ）澄み渡る此原の草木も心あるやらん
（シツトリト）草木も心あるやらん。　ワキ引（素直ニ）猶く佛ぼの前の
事委しく。物語り給へ　地クリ上（確カニ引エテ）打掛昔平相
（拍子不合）国の時。妓女佛乃自ら。温顔

●サシクセ獨吟

シテサシ 舞曲花めきて世上に名を得し遊女ありしは　妓王妓女を召しおかれて遊舞の寵愛甚しくて　地 色香を飾る玉衣の袖の白露起臥の玉簾の内と云ふさらそで。さながら宮女の如くありしは　シテ 思はざるにかとりを得て　地 佛御前を召されしより。御心移りて

シテ 世を とうかな妓王は出され参らせて秋風の音更けて　地 涙の雨もおやみもせぬ　クセ げにや思ふ事適はねばこそ浮世なれ。われは本より優色の。花一時の盛なれぞ散るを何と恨みんや。嵐は吹けども松はもとより常盤なり。いろ歎き。いつ驚かん浮世ぞと思へどもかゝる

をりふしの。来ることそて教おれ。たかも迷を
思まとる（前ヨリ運ビヨク）シテ上（オツトリト）弥陀の古國もそなたそと
地 頼みをかけて西山や。うきせの嵯峨の
奥深き草の庵は隠れがの隠れて住
むと思ひしは思のほかなる佛法ゑ前の。
様をかへ来りたり。とかそもさるはそも
かく捨つる身とあらぬれど。猶も此身

の恨めしさの。執心残るそもかなる
心持つ人かや。今こそ真の。佛なれまし
まそそ。数珠を手に合せ感涙を流せ
ばかりなり。（折切）昔語りさて置きぬ。さて
今宗をとひ給ふ。身いかなる人やらん
シテ上（穏カニ拍子ヲ）われは誰とか名代の。松の葉結ぶ露の
身の。行くへを何と問ひ給ふ
地上（サワリ）行くへ

何處(イヅク)て白雲の。跡を見よとや此原の

シテ(素直ニ)草の庵にて有つや 地(サラリ)露の身を置く

シテ(丁寧ニ)草堂の 地上(物静カニ運ビ行) 名(ナ)ハ佛よといひ捨て。

三千世界の影ハ草(カサ)夜(ゴロモ)。尾花(ハナ)が袖の露

今(ケフ)草堂のうちよりのりよけり 草堂(ドウ)

のうちよりのりよけり 中入

●雜子切迫 待謡 (拍子合)

早上歌 (最シク シウトリト)

松風寒き此原の。松風寒き此原の。

草の假寢のとこそもよ法を聞て

夜もすがら。すの跡とよぞ。ありがたき

すの跡とよぞ。ありがたき 後シテ上ニ(優ニスラリ) 一声(拍子不合) あらあり

がたの。經や。はや明方よもぐるや

らん。遠寺の鐘も響よ響き。月落ち

ぬる山葛の。嵐烈しき假寢の床よ。

夢ぞ覺まし給よ 地(シウトリト) 夕(ユフ)ト 賢(サカ)ト 上(穏カニサラリト) 不思議

やな佛の原の草枕よ。遊女の影の見え給ふハ。いかさま聞こゆる佛御前の。幽靈にてぞましますらん

シテ詞(内トツテ) 心恥かし あからさまへの。佛といはれし名を便りて。

輪廻の姿も歌舞をなす

ワキカん上(サラリ) 極樂世

ワキ(確カリ) 界の法の聲

シテ(漸次ニ詰メテ) 佛事をなすや

シテ上 此原の佛の舞の。妙なる袖

地(前ヲ承ケテタップリト) 草木も靡く氣色かな

シテワカ上(優ニ晴ヤカニ) 獨なほ。

序ノ舞

●仕舞

地上(拍子合ハん) おの〳〵佛の名をも尋ね見ん

シテ(静ニ品ヨク) 法の聲へる。法の場人。法の場人の

地上 前佛ハ過ぎぬ

シテ(静ニ) 教も幾程の世ぞや

シテ(静ニ) 後佛ハいまだあり

地上 夢の中間ハ

シテ(静ニ) この世のうちぞや

地上 鐘も響き

シテ(静ニ) 鳥も音をなく

地上 よそのうちなる夢幻の。

一睡のうちぞ。佛もあるまじ。まして人間
何も（合方）嵐吹く雲水の。天より落めるなの。露の
名をば。何とう返さ舞の袖一ぱい。擧げ
ざるうちをとそ。佛の舞といひべけれと
謠ひをてて失せよけりや謠ひをてて
失せよけり。

善知鳥

解題　旅僧、越中立山地獄にて陸奥外の濱の獵師の幽霊に逢ひ、言傳によりて其妻子の許に到り、共に供養したるに、亡霊現れて冥途の苦患を語る。「陸奥の外の濱なる呼子鳥鳴くなる聲はうとうやすかた」といふ歌に就きての俗説に基く作なり。或は烏頭の字を當て、また別名を烏頭八潟といふ。後世、世阿彌の作と傳ふれども明ならず。親元日記（寛正）粟田口猿樂記（永正）等に記錄あり。

能之小書　外の濱風といふ小書附の能にありては、キリの「善知鳥はかへつて鷹となり」以下の文句を左の如く更へ、形にも常と更ふる處多し。

シテ　ことわりやわれあるから
地　ことわりやわれあるから。身より出て悪
報のせめ。一人よまきてとよも。是ありやくこそ。作りし罪を。
さんげよあらさまを。己者の。姿はあるかあるきかよかげろふつく夜。
あけゆく空。外の濱かぜ波の音。うつゝよ消えてさむる夢の。
うつゝよまきて覺むる夢の。面影か。蓑笠よ殘るうんたゞ
みの笠ぞ殘りける

謠ひ方梗概　阿漕、鵜飼などに似て、それよりは節も細く位も聊か重けれども、通じて卑賤の體を本とし、寂びて趣有るやうに扱ふ。

シテ 前は荒れすさびたる老人なれば、總じて繕ひ無く衰へたる樣にもてなすべし。呼掛は聲を上に取らずして大きやかに確りと出で、**ワキ**との問答はこびて懇なるべく、「や、思ひ出でたり」以下半ば獨言のやうに言ひ、「木曾の麻衣の」云々を抑へて、節を大事に扱ひ地へ渡す。後は前よりも位を進め、少しく勢を有つべきも、若々しくならぬやう、稍強き處ありて澁かるべし。出の謠は靜に寂しく古歌を口すさむ心にて謠ひ出し、「一見卒都婆」云々よりサシの調子にて少しく氣を起し、「永く三惡道をば」以下クドキの味はひにて蕭やかに謠ふ。「あはれやげに古へは」云々は抑へて佗びしげなる中に稍さらりと取り、「あらなつかしやといはんとすれば」と強みを本に氣をかけて地へ渡す。次の**サシ**はさらりと扱ひ、クセの上端はおつとり謠ふ。「うとう」は大きく、「うとうは却て」云々は引き締めて出づ。

ツレ 位大方常の如くなるべし。「げにやもとよりも」云々は獨悲むところなれば、サシの調子ながら稍靜に低めなるべく、「これは夢かや」云々は籠めてしつとりと承け、「いざや形見を」云々より氣を更へて稍さらりと、「あれはともし」云々は高めにすらりとあるべし。

ワキ 尋常にして締り好きが宜し。名告は少し大きく確りと出で、一息の間をとり、「さてもわれ」以下程好き運びをもちて寬りと謠ひ、シテ出でゝよりは位を讓りて詞を言ふべし。中入後、**ツレ**との問答は詞の長短それ〴〵に謠ひ分けてだれぬやう心し、掛合順次に詰め、「南無幽靈」云々を前とは別の調子にて、靜に殊勝に扱ふ。

地 前の「これをしるしにと」云々は靜にしつとりと附け、返しより稍さらり心に扱ひ、「亡者は拉く〳〵」と心持ありて、以下鎭めてぼんやりと謠ひ納む。後は「疑ひも夏立つの」の上歌をさらりと附け、「やがてそのまゝ」より心持を少し更へて締め氣味に鎭め行く。「衆罪如霜露」云々の下歌は靜に確りと承け、上歌より稍引き立てゝすらりと、景色を見渡す趣に謠ひ、「橫障の」云々の上歌は强みにかゝつてすら〳〵とあるべし。クリは確りとして運びを有ち、**サシ**はさらりめに、**クセ**はさして靜めねども、驅しからず大事に扱ひ、上端後少し位を進む。「親は空にて」云々は氣を掛けて確りと乘り「かさゝぎか」にて乘りを外し、此一句やゝ大きく扱ふ。以下修羅乘りの調子にて弛みなくどつしりと謠ひ、扱けぬやうに謠ひつゞけ、同じ味はひにて呼吸能く謠ひ納む。

注意すべき謠ひ方

二枚裏の「木曾の麻衣の」は楊貴妃の「其初秋」、女郎花の「小野の賴風」などの類にて、節附には中とあれども上音を確り抑へたる如き調子にて謠ひ出し、「木曾の」と「麻衣」との間を拔くが如く「ア」の音を籠め、バリを內へとり充分抑へて張る。

辭解

外の濱 古、陸奥の國東津輕郡の靑森灣に面せる沿海の地の汎稱。或は今の靑森市附近をのみ呼ぶともいふ。西行の歌に「陸奥のおくゆかしくぞ思ほゆる壺の石ぶみ外の濱風」。**立山** 越中國中新川郡の東南に聳ゆる乘鞍火山脈の一支嶺。日本法華驗記に「彼山有二地獄原一。遙廣山谷中、有二百千出湯一。從二深穴中一涌出。（中略）其原奧方有二火柱一。常燒爆燃。此有二大峰一名二帝釋嶽一。是天帝釋冥官集會。勘二定衆生善惡一處矣。（中略）從レ昔傳言。日本國人造レ罪。多墮在二立山地獄一云々」と。又今昔物語、寶物集等にも見え、今猶溫泉、地獄谷、死出山、三途川などゝ稱する嶮難の箇所少からず。**禪定** 行を修する事 **山路に分つ** 云々 山中を地獄、餓鬼等の六つの衢に準へたる稱呼のありしなるべし。**惡趣** 惡業に依りて趣く場所。地獄等。**慚愧** 自他の前に罪惡を慙ぢ愧づる修行上の要術。**山下** 山の下に懺悔を掛く。**上の空に** 漠然と捉へどころも無く。**やはか** いかでか **承引** 聽き容れ **今はの時** 命終の時 **尉** 老人 **木曾の麻衣** 著に掛けて出す。信濃の麻布は古く延喜式に見え、「信濃なる木曾の麻衣」などゝ歌に詠まれたるもの多し。**旅衣** 賜びに掛く。**雲や煙の** 云々 地獄谷より雲煙の立ち上るを立山に掛く **木の芽も** 云々 古今集に「震立ち木の芽も春の」云々とある類の辭法を借りて草木の萠むに地獄の火の燃ゆるを掛けて、時の春なるを遙々と繼ぐ。**客僧** 他より來れる僧。**あだに** 空しく。はかなく。**忘れがたみ** 忘れ難きにと云ふを、遺しおける形見卽ち遺兒に掛く。**四手の田長** 郭公の異名。四手と死出と同意なるより亡き人を云はんための序とす。**蓑代衣** 蓑の代りに著る衣。見るとの身の代とに掛く。**藤袴** 萬葉集に「須磨の海人の鹽燒衣の藤衣間遠にしあれば未だ著なれず」とあるを借る。藤衣は藤を布に織りたる賤者の服にて、單に粗衣の意。間遠に織れるとは糸と糸との間のまばらに織りたるをいふ。こゝには藤衣といふを、一度藤袴といひて、さて衣と續けたり。袴といふに深き意あるにあらず。**夏たつけふ**

の疑も無しと掛け、更に夏の立つを衣の縁語裁ちに、今日を陸奥の狭布に掛く。新勅撰集に「夏衣たちかへてけるけふよりは山時鳥一重にぞ待つ」合す衣を合せ較ぶる意そて そこにての約。袖にかけていふ。南無幽霊云々亡霊を弔ふ廻向文。生死輪廻の迷界を脱出し速に菩提佛果を證得せよとなり。呼子鳥古來説多けれども如何なる鳥なるか定かならず。普通には鳴く聲ものを呼ぶに似たりといひ傳ふ。うとうやすかた謡曲作者が鳥として扱ひたるより後人亦之に從ふもの多けれど謡曲以前の書或は歌集に斯かる鳥の名の絶えて見えざるは訝しき事なり世阿彌より少しく後の人なる一條兼良が書きたりと傳ふる鴉鷺いくさ物語に「子を思ふ泪の雨の裳の上にうとうとなくはやすかたの鳥」云々とあり、又鵜鶏(うとう)の文字も見ゆるは、或は此曲の創作と何等かの關係あるには非ざるか。然れども、やすかたは今青森市に安方と稱する町名あり、古へ洲潟の地なりしなるべく、安潟の意ならんか。うとうも吾妻鏡に多宇末井(タウマヰ)の地、郡中名字に鵜取(ウトウ)と呼ぶ土豪の何れも陸奥國にありし事見ゆれば、或は地名かとも思はる。此「陸奥の」の一首古歌の如けれど何の集にも見えず。謡曲拾葉抄には松葉名所和歌集(萬治年中)の説を採りて「定家郷の歌なり、夫木抄に入る」と記せど、夫木抄を始め他書にも似寄りの歌も無し。今青森に善知鳥神社、有間塚(うとふづか)などあるは恐らく謡曲以後のものなるべし。一見卒都婆云々塔婆開眼の偈文。卒都婆は無量の功德を具ふるものゆゑ一度拜見したるのみにても永く地獄餓鬼畜生の三惡道を遁れ得べしとなり。いかにいはんや云々同偈の次句「何況造立者、必生二安樂國一」に據る。養なるが、こゝには後世俗に所謂卒都婆卽ち柱又は板に五輪の塔形を彫みたるものを立てゝの供養なるべし。紅蓮、大紅蓮いづれも佛説八寒地獄の中。紅蓮地獄は酷寒の爲膚肉裂けて紅蓮華の如くになるといふより名づく。大紅蓮は其一層烈しきもの。名號智火彌陀の名號南無阿彌陀佛と眞實圓滿なる佛の智慧と、之を火に譬へて、寒氣も消え暖くなるべしといひ續く。焦熱、大焦熱いづれも八熱地獄の中。焦熱地獄は獄火、熾烈にして罪人を焦燒するが故に名づく。大焦熱は其一層烈しきもの。法水佛法を水に譬へたる語。觀普賢經に「諸佛菩薩慧明法水」云々。衆罪如霜露云々觀普賢經の偈に「衆罪如二霜露一、慧日能消除」。謡曲作者は寶物集の引文に依りたるにや。思惟懺悔の功德は日光の霜露に於ける如く能く諸の罪を消除すとの意。奥に海あ

る陸奥の奥の字に重ねて出す。奥の海は今の青森灣をさすにや。夫木抄に「奥の海汐干のかたの片思ひおもひやゆかむみちのながてを」。下枝下方の枝汐蘆汐のさし引きする所に生ひたる蘆。末引きしをる云々蘆の生ひ列れるが汐にしをれつゝ浦里を圍む籬ともなれるを、陸前鹽竈の沖なる籬の島に掛けていふ。引きしほは引汐に、浦は末(うら)、裏に掛れる詞なり。陸前の籬が島と外の濱とは遠く離りて縁なけれども、陸奥と一つに云ふより同地方のものゝ如く扱ひたるなり。苫屋形苫を屋根形に葺きたるもの圍ふとすれど云々圍はんとしてもまばらなる苫屋の、月の爲に却つて風情ある意。あれはとも云々同語卿長の謡にもあり。古俗、幽靈に聲をかくれば其姿消え失すと云ひ傳へしよりいふ。いとほしかはゆし千代童幼兒の假名。横障の雲慧日の光を障蔽する煩惱の雲。觀普賢經に「我今所懺、眼根重罪障蔽穢濁、盲無所見」。姫小松小さき松。こゝには千代童丸をさす。木隱笠姫小松の縁にて木隱れといひ、子の隱れて見えざる意に通はせ、手向の笠を呼び起す。輪田の笠松今攝津國兵庫和田岬附近に在りし名松。夫木抄に「さして宿りのわだの笠松」などあるにて前の木隱笠を受く。箕面の瀧蓑に掛けて出す。前同國豊能郡箕面山中に在り。此瀧波を袖の涙にたとへ、波の縁語立つといひて卒都婆の造立に掛く。そとはたれ卒都婆に音を重ね。外に立てるは誰ぞと自ら問ふなり。隔横障の雲の隔を結ぶ。蓑笠に隔てられて見えざるに云ひなす。松島や小島の云々松島は陸前の名勝。小島は陸前の名勝。新古今集に「松島や小島の苫屋波にあらすな」などあるを借りて妻子を内にゆかしみ、我は外に居るといふを濱の名に掛けて千鳥を出す。往事渺茫云々和漢朗詠集白樂天の詩句。舊遊は昔遊びし人泉に歸すとは死沒する事。士農工商武士、農民、工夫、商人の職。管子は此四を國家の柱石といへり。琴棋書畫法書要錄に出づ、何れも高尚なる嗜み。遲々たる春の日和漢朗詠集に「遲々兮春日」。遲々は日の永き貌。所作足らねば云々殺生の仕事に足るを知らざれば日の永きもうつかり過すとの意秋の夜長し云々和漢朗詠集に「秋夜長夜長無レ眠天不レ明」。九夏陰暦四、五、六の三月九十日玄冬纂要に「冬曰二玄冬一」鹿を逐ふ云々淮南子に「逐レ鹿者不レ顧レ兎、又

逐レ獸者目不レ見二太山一」。**忘草** 萱草又は蘆の異名。忘れると掛けて草の縁語生ひの音をうけて追鳥を呼び起す。**追鳥** 野の四方より追ひ立てゝ鳥の立つを打ち又は射殺し、或は鷹を放ちて捕ふる獵法。主に雉又は鶉に用ふ。**高縄** 縄に黐を塗りて鳥のかゝるを捕ふる獵法。主に雁鳧の如き水禽に用ふ。**さしひく** さしは高縄を設くる事。又竹竿に黐を塗りて鳥をさす事。ひくは鳥をさす竿を引く事。さしひくと云ふを受けて汐を出す。**末の松山** 陸前國宮城郡八幡沿海の沙丘をいふとぞ古今集に「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなむ」とあるより、波こす、汐こすなど詠みたる古歌多きを引く。新千載集に「知られじなかはる契の末の松神に波越す根ありとは」などともあり。これも同じみちのくなれば玆に出す。**沖の石** 千載集に「我が袖は汐干しらねかわくまもなき」とあるを借るにや。妻や子に隔りて添ひ難きを悲む心なるべし。干潟は此歌の「汐干」に寄せて云へるにて潮の干たる潟の意なるが、前(「奥に海ある」の解)に引ける夫木の歌にも「汐干のかたのかた思ひ」などあれば、それこれ取り合はせていふなるべし。**千賀の鹽竈** 常は海水を距てたる里までも干潟になれば近くなるといふを、同じくみちの名勝千賀の鹽竈に掛け鹽竈は汐を焼くものゆゑ、それに寄せて身を焦すといひ、今妻子に近づきながら徒に身を焦す心を兼ぬ。風雅集に「身を焦す契ばかりか徒に思はぬなかの千賀の鹽竈」。**事業** 仕事 **とりぐに** 云々やすかたの鳥と受けてとりぐ〳〵様々なる獵法の中にもと云ひ次ぐ。**此鳥** 凡そ鳥といふものはの意。**筑波嶺の** 云々筑波嶺は常陸にある山にて、木立繁きこと古歌に多くよまれたれば木々の梢と云ひつぐ。**頻波** 葉の音にて羽を敷くといひ、頻に寄する波(頻波)に掛け、波の縁にて以下水禽に辭を移す。**浮巣** 波に浮くと掛く。蘆又は枯葉にて水上に作る鳥の巣。新後拾遺集に「浮巣をかけてこほる池水」か

けよかし 造れとの意を絡めていふ。**平沙に** 云々瀟湘八景の一なる平沙落雁に詞を借る。雁は水渚沙立に宿る鳥なり。玆にてはうとうやすかたの鳥と一つに見て綴れるにや。此邊の文脈聊か解し難き節あり。或は創作時代の文より變遷ありしなるべし。**呼ばれて** 云々獵師が親鳥の鳴く聲を摸してうとうといへば親鳥かと思ひて子鳥はやすかたと應ふるより在所發明して取られ易しといふをやすかたに掛く。此、うとうと呼べば子鳥やすかたと答ふといふ説は前掲の「なくなる聲はうとうやすかた」の歌につきての俗説なるが、此俗説と此の謠曲とは何れが前なるか判じ難し。或は此曲、保元物語鬼か島(隱れ笠、隱れ蓑のことなどをも記せる)の條に身を隱し聲を學びて呼べば、その聲につきて鳥多く飛び入るを穴の口を塞ぎて闇取にするなりといふ」とあるに想を得たるものにて、俗説は此曲より生れたるには非るか。

親は空にて 云々法苑珠林に地獄經を引きて「諸鳥失レ子悲鳴嗷裂眼中血出」。**菅蓑** 菅にて造りたる蓑 **隱笠隱蓑** 之を著るものは其形を人に見られず、又人の隱し事を見聞し得と想像せられたる寶、我が笠蓑はかゝる寶にもあらねば隱れ終せずとなり。**目もくれなゐ** 目のくらむと血涙の爲に紅くなりたるに掛く **紅葉の橋** くれなゐに重ねて紅葉、渡るに因みて橋と繼ぐ。七夕の夜烏と鵲と羽を並べて橋となし牽牛織女を渡す。此二星の分れの涙羽に染みて紅になるといひ傳へ、古今集に「天の川もみぢを橋に渡せばや」云々とあるなどに想を得て綴る。かさゝぎを笠に通はせたり。**怪鳥** 往生要集無間地獄の項に「有二惡鳥一。身大如レ象。名曰二閻婆一。背利出レ炎。熱二罪人一。遍上二空中一。東西遊行」。又「爾事便有二鐵背大鳥一。上二彼(罪人)頭上一。或上二其髆一」。**眼を つかんで** 同書同項に「此鳥探二啄眼睛一而噉二食之一」。**しゝむら** 身體の内 あるを鳥の事にして用ゆ。**猛火の煙に** 云々同書無間地獄の項に、阿鼻城の四角に四の銅狗あり「一切毛孔。皆出二猛火一。其烟臭惡。世間無喩」。**鷹となり** 鷹は犬などゝ共に地獄にて罪人を噉食追責すといはれたる鳥なれば、婆婆の時と反對に己が雉となりて惱まさるとなり。**鴛鴦** 陸に掛く **羽脫鳥** 羽の脫け變る頃の鳥。**吹雪** 鷹狩は古くは冬の行事の一にて雪中の古歌も多ければ吹雪を出す。新續古今集に「御狩せし狩場の跡も今は世にあはれ交野の雪のふる道」。**交野** 遁れ難しといふを受く。交野は河内國北河内郡の遊獵地。

裝束附

前シテ (獵師の霊)

面笑尉又朝倉尉にも、尉髮、襟淺黄、着附無地熨斗目、茶水衣、腰帶、尉扇。

後シテ (獵師の霊)

面痩男又河津にも、黒頭、黒地金緞鉢巻、襟淺黄、着附無地熨斗目、白縷水衣、縫紋腰帯、腰筴、善知鳥扇、杖。

子方（千代童）謠無し
襟赤、着附縫箔、兒袴、紋附腰帯、扇。

ツレ（獵師の妻）
面深井、鬘、鬣帯、襟朽葉色の類、着附摺箔、無色唐織着流。

ワキ（僧）
角帽子、無地熨斗目、水衣、腰帯、扇、珠數。

四番目
畧二番目

善知鳥

四月　後ヴレ獵師ノ妻　子方千代童
シテ獵師ノ幽霊　（謠ナシ）
ワキ旅僧

ワキ（尋常ニ確カリト）
これは諸國一巡の僧にてゐわれ未だ
陸奥（ミチノク）の濱も見ぬ程なれば此度思ひ
立ちの濱一巡と志してゐ。よきついで
でなれば程なれば立山禪定（タテヤマゼンヂヤウ）申さばやと存ゐ。

見ぬ程なれば

（義ヲ更ヘテ穏カニ）
急ぎの程なれば。これはや立山なれば著きてゐ。
心靜（シヅカ）に一巡（ヰメグ）せばやと思ひゐ

（寛タリト結ヒ）
カヽ上ニ

（柏子木合）
ヨワク

さても

われ此立山より来て見れば、まのあたり
ある地獄の有様。見ても恐れぬ人の心ハ。
鬼神より猶怒ろし。やハ山路より合つ獵
の數。多くハ悪趣の嶮路ぞと。涙も更ら
留めえぬ。(声調ヲ申ノ(ベ)ル心シテ)斬鬼の心時過ぎて。山下ら
とそハ下りけれ山ドよりこそハ下りけれ

シテ行(物凄ク確カニ大キク)
呼掛 のうのうあれまする所ア僧ら申まべき事

ワキ(サラリ)
の。何事まそハぞ シテ(コビテ静ニ)陸奥へ所下り
いなぐ。言傳申ゆべし。外の濱まそハ獵師
まそハ者の。去年の秋ゆまかりて。其
妻やゆの宿ア所尋ねひて。それらハ
蓑笠手向けてくれよと作せゆへ

ワキ(素直ニ滞リナク)
これハ思ひもよらぬ事を。承りハものかな。
届け申まべき事ハ易き程の所事まそ

いさりあづらよの宮よ申してハやちかぢ
新しいべき　シテ（静ニ確カリトタシカ）げに確なる去るおくてハ
かひあるまじ。（コメテ）や。（氣ヲ更テ）思ひ出でたり在りし
世の。（確カリ）今ハの時まで。此尉ぢ。（拍子ネ合）昔の麻衣
の袖を解きて　地上歌　（静ニシツトリト）これを去るしよと。（拍子合）
涙を添へて旅衣。立ち
別れ行く其跡ハ。雲や煙の立山の。末の

芽も萌ゆる為しと。（静ニ八八物寂シク）客僧ハ奥へ下れば。
亡者ハ泣く泣く見送りて行く方知らぬ
ありよりけり行く方知らぬありよりけり　中入
ツレ上（聊カ低目ニサラリト）げにや。（拍子ネ合）本よりも定なきせの習ぞと。
思ひあづらも夢のせのあだよ契り
恩愛の別の後の忘れがたみ。それさへ
涙き悲みの母ぢ思をいうよせん　ワキ附（穏カニサラリ）いうよ

此屋の内へ案内申いたん　誰（スイリ）なれて渡
りいぞ　口半（健カニサラリ）　これい諸國一見の僧なていぐ。
立山禪定（タテヤマゼンギョウ）申いた處ぞ。其樣（サマ）荒（スサ）まし き老
ぐのありしぐ。陸奥（ミチノク）へ下らば言傳（コトヅテ）まべし。
外（ソト）の濱まで、獵師なていた者の。去年（コゾ）の
秋死（シ）まりていた。其妻子（サイシ）の宿を尋ねて。
それは暮笠（ミノカサ）手（タ）向けてくれよと仰せ

いた程ぞ。上（ウワ）の空（ソラ）ぞ申してゝやちかぢ嫁引（ショウイン）
いべきと申していたへば。其時見さしたる麻
衣（ギヌ）の袖を解（ト）きて賜（タマワ）りていた程ぞ。これ
まで持（モ）てて来（キ）りていたも思（オモ）めあたる
事のいか（ツルヲ中（氣ヲコノテシウトリト））これい夢か幻（イカ）ぞ。
四手（シデ）の田長（タナガ）の亡（ナ）き人の。上（ウエ）向きあへぬ
屋（イヘト）ぞ。行（靜ニカヘッテ）かさりなぐら餘りぞ心もとなきぞ

事なれば。いざや形見を暮代衣。向遠
よ織れる藤袴。（順次ニ詰メテ）
頃も久しきかたみ
あづら（唯カリ）
今取り出（サラリ）
よく見れば
地上歌（ウタガ作ル）
（サラリト粘ラズ）
（柏子合）
疑ひも。夏立つけふの薄衣。（夏立つ新切）
けふの薄衣。一重なれども合はれば。
そなたありけるぞ。あらなつかしのかたみ
（義ヲ更ヘ引締メテ）
（義ヲ更ヘ）
みややそのまゝ。弔ひの。法を重ね

數この中よこ者の望むある。暮笠を
こそ。手向けけれ暮笠をこそ手向け
けれ。（殊勝ニ）
（柏子不合）
（後ニシテ中ニ）（静ニ寂ビテ）
南無冥霊出離生死頓證
菩提。
（一声）
陸奥の外の濱なる。呼子鳥。（上ニ義ヲ起シテ）
鳴くなる聲はうとうやまかた。一目
卒塔婆永離三悪道。此文の如くば。
（以下シメカミ）
假令捧申したりとも。永く三悪道

をば逃るべし。いはんや此身のため。
造立供養に預からんをや。假令紅蓮・
大紅蓮なりとも。名號智火には消え
ぬべし。焦熱大焦熱なりとも。法水には
勝たじ。さりながら此身は重き罪科の。

地下歌　中（静ニ確カリト）　カヘテ

心は。やすかたの鳥獣を殺し
衆罪如霜露慧日の日に照らし給へ

地拍子　慧日の日に（拍子合）

●小謡

（シヅメル）上歌（ヤ、引立テ、スラリト）

處は陸奥の。處は陸奥の。奥
に海ある松原の。下枝に交る汐蘆の。
末引きしをる浦里の。籬が島の苫屋形。（前ヘ戻シテ運ビヨク）
圍ふとすれど疎らにて。月のためには
外の濱。心ありける。住まひかな心あり
ける住まひかな・（拍子不合）ツレカヽル上（高メニスラリト）あれはともいはで
形や消えなんと。親子手に手を取り組

みて。泣くぎやりあり。有様かな　哀や
げよ立へかすもも契りし妻やこも。今は
うとうの音よ立きて。やまやたの島の
安からぬぞや。何しよ殺しけん。我が子の
いとほしきかくよこそ。鳥獣も思ふ
らめと。千代童が髪をかき撫で。
あらあつかやといきんとまれぞ

（抑へテ他ヒテスラリ）シテ上ニ

地上歌（強味ニカヽワテ拍ラズ）

（拍子合）横障の。雲の隔り悲しや。雲の隔り
悲しや。今まで見えし姫小松のはか
やどくよ。未隠笠ぞ津の國の。輪田
の笠松や。箕面の滝つ波も我が袖よ。
立つや卒塔婆のそとたれ。菅笠ぞ
隔りけるや。松島やゝ島の苫屋うち
ゆかれ外の濱千鳥。音よ立て

●サシクセ獨吟
切迫囃子

泣くより外の事ぞなき
往事渺茫としてすべて夢に似たり。舊遊零落して半ば泉に歸す
シテサシ上　とても渡世を營まば。士農工商の家にも生れず
地　又は琴棋書畫をたしなむ身ともならず
シテ上　唯明けても暮れても
地　殺生を營み　遲々たる春の日も所作足らねば時を失ひ。秋の夜長し夜長けれども。漁火白うして眠る事なし
シテ中　九夏の天も暑を忘れ
地　玄冬の朝も寒からず
クセ中　鹿を追ふ獵師は。山を見ずといふ事あり。身の苦しさも悲しさも忘草の追鳥高繩をさしひく汐の。末の松山風荒れて。袖に波越す沖

の石。数い千潟。そて。海越しなり。里ま
でも。千賀の塩竈身を焦。報も
忘れける事業をなり。悔さよ。そも
そもうそうそう。やまたのとりくよ。品
変りたる殺生の中よ無慚やな此
島の地（前ヨリ運ビ来ル）愚なるかな筑紫の。木どの
猶よも羽を頻ばの浮巣をもかけよ

かし。平沙よ子を生みて落雁のはう
なや親隠まそまそ。をれどうとうと呼ぜ
れて子はやまやたと答へけりさてそ
取られやまやた（箱子不合）うとうと（箱子合ハル）親は空
よて血の涙を。親は空よて血の涙を。
降らせば濡しとて菅蓑や。笠を傾け
こてかとの。便を求めて隠笠隠蓑

みもあらざれば。猶降りかゝる。血の涙
に目もくれなゐに染み渡るは。紅葉の
橋の。かさゝぎか。娑婆にては。
うとうやすかたと見えしも。うとうやすかた
と見えしも。冥途にては化鳥と
なり罪人を追つ立て鐵の嘴を鳴らし。
羽をたゝき銅の爪を磨ぎ立てゝは。眼を
つかんで肉をさけばんとすれども猛火
の煙にむせんで聲をあげ得ぬは鴛
鴦を殺しし科やらん。遁げんとすれど
立ち得ぬは。羽抜鳥の報か。うとうは。
却つて鷹となりわれは雉とぞなり
たりける。遁れ交野の狩場の吹雪に。
空も恐ろし地を走る。犬鷹に責めら

れてあらぬ心うとやきたなき隙
あき身の苦みを助けたべや僧
助けたべや僧と云へと思へど
失せにけり。

解題 大原野の花盛を背景に、伊勢物語の文と歌とを辭句の綾とし、都の人在原業平の典雅なる亡靈に逢ふことを作れり。毛端私珍抄、禪鳳習道目錄等に曲名見ゆ。能本作者註文、二百十番謠目錄に金春禪竹作とあり。又、蔭涼軒日錄に寛正六年九月春日社の祭禮に竹田太夫が演ぜりと見ゆる小原野花見とは思ふに此曲を指すなるべし。

謠ひ方梗概 雲林院に酷似したれども、それ程に位重からず。弱々しからず引締りて底强き中にも優に鮮やかなるべし。

シテ 前は老翁なれど餘り抑へず、花盛に浮かれ出づる體なれば少し浮きやかなるべし。先づ一聲は以上の心得にて音を少し低めに取り、サシより稍さらりとなり、上歌は花やげる心ばえにて暢び〳〵と謠ふべし。「思ひよらずや」云々の詞は少し靜に言ひ、カカルにてさらりとなり、次の掛合は興に入る心にて順次位を進め、うらゝかなる氣色を寫す。「事新しき問事かな」云々は確りと出で、「申すにつけて」より位を有ちて少し心して謠ふ。ロンギは素直に朗かなるべし。後は品好く若やぎて花々しきを宜しとす。此心得にて「月やあらぬ」を一聲に謠ひ、ワキとの掛合を優にすらりと承け應ふ。サシを更へて確りと起し、クセの上端は引き立てゝ大きやかに扱ひ、「昔かな」を寛りと出で一息間をとり、ワカは長閑に花やかなるべく、地との掛合、乘つて綺麗に趣あるやう謠ひ納むべし。

ワキ 素袍男なれば尋常にさらりと扱ふ。中入後、待謠は稍大きく、「不思議やな」云々のサシはすらりとあるべし。素謠にてはワキヅレを要せず。

地 一の地「をかしとこそは」云々は稍ゆるやかに附け、次の上歌は掛合の謠を承け、拔けぬやうにすらりと附けてさらりと淀み無く、「げにや大原や」より聊か更へて續く。「名殘小鹽の」云々の上歌は昔の春を想ひ出でゝ悲む處なれば、聊か蕭やかに扱ふべきも仰々しくなるは宜しからず。ロンギは前の地よりは引き立てゝさらりと謠ひ、中入まで變らず。後は業平の戀に憧れし昔を現すものなれば前よりも晴やかに美しかるべし。上歌「けふこずば」云々は前を承けて品好くさらりと附け、クリは引き立てゝ節を大きく、節無き處を運び、サシ以下さらりと扱ひ、クセは優にすら〳〵と綺麗なるべし。「ありし御幸を」以下シテとの掛合はさらりと美しく

承け渡し、キリは同じ位にて長閑やかに餘情あるやう諧ひ納む。

辭解 **花にうつらふ**云々 櫻の花にまがはしき美しき雲が遠く嶺にかゝれるを云ひて、花のことのみ心にかゝる意に續く。**下京** 京都市の内、昔四條以南の總名。**大原野** 山城國乙訓郡、今の大原野村の地。京都市の西南約四里。此地に大原野神社とて桓武天皇長岡遷都の時皇后藤原乙牟漏（一に藤原冬嗣ともいふ）が參拜に便せんため春日明神を勧請したりといふ祠あり。崇敬春日に等しく、行幸啓の事史にも見ゆ。現に官幣大社たり。此社は此曲の背景をなすものなれば其心して見るべきなり。**大原山** 古く大原野社の西より南の方今の小鹽村あたりまでの山を稱したるものの又小鹽山ともいふ。**いづくはあれど** 何處何處と處は多けれどの意。古今集にも「陸奥はいづくはあれど鹽竈の」云々。**所から** 桓武天皇大原野に近き長岡の地に奠都し給ひしを含みて都を云ひ起す。**名にし負へる** 花の都といふ詞あれば、さすが舊都の地とて、名に背かず花も盛なりとなり。**木綿花の**云々 「木綿花の」は「榮ゆ」の枕詞なるを、音の似通ひたる「盛」に續け、「云ふ」の音に通はせて出し、本來神前に捧ぐるものなれば手向の序とす。**手向の袖** 花が直に神前の手向となる意と、花見の人の必ず神に參拜する意とを兼ねて出し櫻の爲に下行く人の袖も美しく見ゆる意にて綴る。ひとしほは袖の緣語單にかく。**神も交はる**云々 佛菩薩が衆生濟度の爲その德光を和げて世塵に交はるを和光同塵といへり。神佛不二の說に基き是を神の上に用ひたる例多きにより、其詞を借り來りて神人共に美しき櫻花を賞する意とす。**栞して**云々 栞は道のしるべに過ぎし處の木の枝を折ること。こゝには假に栞と見たてゝ櫻花を折りかざす身なれども、衰へたる老人なれば、人目には老木の柴と見らるゝに過ぎざるべしとなり。**年ふれば**云々 古今集藤原良房の歌。**白雪を**云々 知らるゝを白雪にかけ、白雪を白髮に喩ふ。古今集に「春の日の光にあたるわれなれど頭の雪となるぞ佗しき」。**散りもせず**云々 「けふ見ずばくやしからまし花盛咲きも殘らず散りも初めず」といふ歌を引く。此歌鞍馬天狗の謠にも出でゝ、拾葉抄には定家卿の歌と記せども出處明ならず。**情の道** 物の哀を知る心といふ程の意。**花心** 花やかなる心 **心なき山賤の**云々 源氏物語に「ものゝ情知らぬ山賤も花の蔭にはなほやすらはまほしきにや」などあるに意を取るにや。山賤は樵夫。**姿こそ**云々 古今集に出でたる兼藝法師の歌「形こそみ山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなん」を引く。拾葉抄に「姿こそ」以下（末の句「なさばならめや」）を夫木抄に出でたる紀友則の歌としたれども、此歌同集をはじめ何れの集にも無し。かせきは鹿なり。こゝには姿は鹿の如く見苦しくとも心は花の如くなさばなるべしとなり。こゝの句、寛永版以前の諸謠本には「心は花になさばこそ、ならばならめや」とあり。**心からに** 心次第にて。**をかしとこそは**云々 前掲の歌の詞書に「女どもの見て笑ひければよめる」とある意を取る。**埋木の**云々 世に埋れ居る身なれど心までは朽ち果てずといふを果てしなやに云ひかく。續千載集に「我が戀はみ山がくれの埋木の朽ちはてぬとも人に知られじ」。**色も香も**云々 古今集の歌「君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」の句を借りて、知らずに向ひ給ふなの意に結ぶ。**いふに及ばぬ**云はんとしても、詞は迚も及び難き意。**うつらふ影も** 花の色の映じて美しき影の多きを大原に云ひかけ、次の歌に續く。**小鹽の山の**云々 後撰集の貫之の歌「大原や小鹽の山の小松原はや木高かれ千代の陰見ん」を引く。**家櫻** 山櫻に對して庭に移し植ゑたる櫻をいふ。**あかねさす** 日といふ詞に冠する枕詞。日も暮るゝ紅にかく。**八重九重** 彩雲紅霞の立ち重れるを九重の都に云ひかく。九重の都は帝都。**都邊は**云々 定家の歌に「都邊はなべて錦と（一本に）なりにけり櫻を織らぬ人しなければ」。**時も日も月も**云々 時は春といひかけて、月の三月（彌生）なるを云はん。**げにや大原や**云々 日も春と云ひて春日の神を思ひ出でたる心にて業平の歌を引く。「大原や小鹽の山もけふこそは神代のことも思ひいづらめ」。これは昔業平と契ありし藤原長良の女高子、後に二條の后といはれ給ひしが、そのまだ春宮の御息所と云ひしころ、藤氏の氏神なる大原野の社に詣でし時、御供のうちにありし業平（伊勢物語原文には「近衛府にさぶらひける翁」）がよめる歌として伊勢物語に出でしものなり。歌意は、今日天兒屋尊の孫苗たる高子が御息所として時めけるを見ては神も其昔天忍穗耳尊に從ひて尊を扶け奉りし當時を思ひ出づるならんとの意を表し、裏に業平が昔高子と契りし頃の事を思ひ出し給へとの意を寓したるものと解せらる。されど是は歌物語に據るものにして史實にあらず。殊に親王の御子なる業平

が藤氏の氏神詣に扈従する謂も無し。**在原業平** 平城天皇の皇子阿保親王の第五子。兄行平と共に在原姓を賜ひし人。**后** 前記藤原高子をさす。**妹背** 契りたる男女 **名殘をしほ**云々 名殘惜しきを小鹽にかく。前に淺からぬと云へるを受けて山深みと云ひ、山の縁にてのぼりての世と續く。**のぼりての世** 昔の世。**昔男** 伊勢物語の一節毎に「昔、男」云々と書き出せるを、後人皆業平の事を記せるものと解したるにより、業平をさして昔男といふ。**しばふる人** 源氏物語に出づる詞。木の葉などを掻き集むる賤の男、老人、しばぶきする人等、解説種々あれど明ならず、**心知られば** 心を知られたらんにはの意にや。或は「心しあれば」の誤か。**老隱るやと** 古今集に「鶯のかさにぬふてふ梅の花折りてかざさん老かくるやと」を借る。**このもかのも** こなたかなた。古今集に「筑波ねのこのもかのもに蔭はあれど」云々。**花のながえ** 車の轅と花の枝とを兼ぬ。**よろぼひさぞらひ** よろめき、さまよひ。**天も花にや**云々 和漢朗詠集に「天醉二千花一、桃李盛也」。**かげろふ人** 春の陽炎をかげろふと云ひ、陽炎に映りて長閑なる太陽をかげろふ日といふ。此詞の日より轉じて人に續く。茲には影の薄れゆく人の意。**和光の影** 「神も変はる」の辭解に出せる和光同塵の意を以て、光の影、影になり、業平と云ひつぐ。業平を神佛の如く扱ひ衆生濟度の爲和光同塵の姿を現じたるものゝ如くいふ。**たまさか** 稀なること。露の玉を受け、其縁にて光といふ。**妙なる法** 前に花心の辭を置きて妙法蓮華經に通はす。**月やあらぬ**云々 業平の二條の后との契を悲みて詠みし歌。下の句「わが身ひとつはもとの身にして」。**やごとなき**云々 貴き。車のや(輻)にかく。**雲の上** 禁中を雲の上といふにより、茲は高子の后を雲上の花に喩へ。及び無き意を籠む。**他生の縁** 前世よりの因縁。**けふこずは**云々 業平の歌 **櫻かざし**云々 新古今集に「百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざして今日も暮しつ」。大宮人、雲の上人、共に禁裏の人の意。**暮るゝ** 車の軸を樞(くるゝ)といふを受けて出す。**春宵一刻**云々 蘇東坡の詩句「春宵一刻直千金、花有二清香一、月有レ陰」。**思ふこと**云々 伊勢物語の歌 **思ひうちより**云々 詩經に「思有二於内一、必形二於外一」。**春日野の**云々

伊勢物語の歌。末句「限知られず」。**陸奥の**云々 古今集河原左大臣(融)の歌。伊勢物語に前の歌の次に出づ。**紫の色に**云々 前の歌の「若紫」の語を受く。戀に憧れし意。**唐衣**云々 「旅をしぞ思ふ」まで伊勢物語の歌。業平の陸奥に下る途にて詠みし歌なり。**心の奥** 人を思ふ心の奥に陸奥を兼ぬ。以下いさ知らず、白雲、雲のくだり、くだり月、月の都、都の東山、東と同字なるあづま、あづまの果、果しなと順次云ひかく。**下り月** 十五日以降の月。こゝには業平の陸奥に下りしを寓す。**はてしな** 果を知らざること。陸奥はあづまの果なるを受く。**武藏野は**云々 武藏野の果無しと云ひ馴はしたるにより、前句を受けて出す。伊勢物語の歌なり。末句「われもこもれり」。古今集には初句を「春日野は」に作る。此武藏野は奈良の春日野の一名なるをこゝにはあづまの武藏野の如く扱ひて出す。**こもる心は**云々 胸に疊める思の多きを大原にかく。**戀ぐさ** 戀しく物ふ種。それを忘草にかけて忘れめやといふ。忘れめやは忘れじの意。**まどろめば** 伊勢物語の歌「寢ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな」を胸に置きて綴る。**夢か現か** 古今集に出でたる女と業平との贈答の歌に、女「君やこしわれやゆきけんおもほえず夢か現かねてかさめてか」、業平「かきくらす心の闇にまどひにき夢現とはよひと定めよ」。此事伊勢物語にも出でたるが、これには業平の歌の末句を「こよひ定めよ」とせり。

裝束附

前シテ (老翁)

面朝倉尉又阿古父尉にも、尉髪、襟淺黄、着附無地熨斗目又小格子厚板にも、茶水衣、緞子腰帶、尉扇、櫻枝持つ。

後シテ (在原業平)

面中將又は今若、初冠又追掛卷纓にも、黑地金緞鉢卷、襟白二、着附赤地縫箔、込大口、差貫、單狩衣、縱入腰帶、黑骨爪紅扇、眞太刀。

ワキ（花見の男）
着附段熨斗目、素袍上下、小刀、扇。
ワキツレ（同二人）
着附無地熨斗目、素袍上下、小刀、扇。

三番目
又四番目

小塩（シオ）　三月

シテ　在原業平ノ霊（前ハ老翁）
ワキ　男

ワキ次第上（三拍子常ニサラリ）
花のようろろ顔の雲花のようろろ顔
の雲ゆるるや心ゆるるらん　ワキ行（健カシ）　かやうに
者ハ下京（シモギョウ）邊より住まひする者にて
さても大原野（オオハラ）の花今を盛（サカリ）なるより
誘ひ及びの間若き人どもと伴（トモナイ）ひ申し
唯今大原山へと急（キク）ぎぬ　面白やいざ
（拍子不合）

くれあれど處から。花も都の名ゝ負へる。大原山の花櫻　上歌（三人）（拍子合）

今を盛と木綿花の。今を盛と木綿花の。手向の袖も（前ヨリ）ひとゝ。ほゝ。色そゝ春の時を得て。神運ビヨク

も立る塵の世の。花やゝ心ゝ。まらん（音ヲ低クシテ静ニ）

花や心ゝ任せらん（拍子不合）栄して。花を

散ずゝの袖あゞら。老木の紫とゝ。人や見ん

サシ上（節カサラリ）

年古れど齢ハ老いぬ然ハあれど。花

を見れば物思ハも。ちゝと詠みしも身

のよゝ。今白雪を戴くまで。さゝ世番る

春の日の。長閑けきち代の時ちゝれや

上歌（夷カニ暢ビヤ）

●小謡（拍子合）

散りもせぬ。咲きも殘らぬ花盛。咲き

も殘らぬ花盛。四方の氣色もひとゝ

ほゝ。ほゝ。ほゝ満ちる色ゝ。清ゝ。情の道ゝ

誘はるる。老を厭ひそ。花心。老を厭ひそ
花ごころ。　不思議やな貴賤群集の
其中より猿より辛たけたる老人花の枝を
なぜ。さも花やうより見え給はいそも
何處より来り給はぬぞ　思ひよらぬぞや
貴賤の中より。わきて言葉をかけ給はい。
さも心なき山賤の。身をも應せぬ花

ぞきぞと。お笑ひあるな人ごとよ　カん上（豊ニカニサラリ）
山のかせきよ似たりとも。心は花よ
あらぬこそ。なぜならあや心からよ
地　中（稍ユルヤカニ）
カヘテ（拍子合）　ととそは賢ぎらあ。よりや此
身は埋木の朽ちは。果てしなや心の。
色も香も知る人ぞ知らぬ。なぜ問はせ
給ひそ　ロキ（穏カニサラリ）
あら面白の戯れやな。よも

眞(マコト)よハ腹立て給ちゞ。いろさまゆゑある心
言葉の奥(オク)ゆかしき事を語り給へ　何と
佐ヲ進メテ
語らん花盛(ハナザカリ)のよ及ぶぬ氣色をば。
ロキカル上
いろハ思ひ給はらん(柏子木合)　げに〳〵妙(タエ)なる
梢の色。うつろ蔭も大原や　シテ白(朗カニ淀ミナク)　小塩の
ロキカル上(サラリ)
山の小松(コ)が原より煙(ケム)る霞の遠(トオ)山櫻(ヤマザクラ)
里ハ軒端の家櫻　シテ(奥カニ順次ニ)　匂(ニホ)ふや窓の梅も

●小謡

地柏子
花衣きるよけりあ
又
花衣きるよけりあ

笑(エミ)き　ロキ(サラリ)　あやねさまで日も紅(ヒ)の　シテ(カヽツテ)　霞(カスミ)
ロキ(サラリ)　雲ゐ　シテ(確カリ)　八重(ヤヘ)　ロキ(サラリ)　九重(ココノヘ)の　地上歌(朗カニ運ビテ)　都(ミヤコ)鄙(ヒナ)とあらべて
錦(ニシキ)とぞ　なりにけり。　あらべて錦とぞ　なりにけり。
櫻(サクラ)を折らぬ人(ヒト)なき。花(ハナ)衣きるよけりあ。
時も日も日も弥生(ヤヨイ)。会(アフ)よ会よ眺(ナガメ)ぬ物(モノ)なし。
(奥ヲ更ヘテ)
げにや大原や。小塩(ヲシホ)の山もけふこそは
神代(カミヨ)も思ひ知(シリ)けれ。神代も思ひ知

イボトて（素直ニ淀ミナク）
られけれ。日本的（素直ニ淀ミナク）なる面白き人よ。来りあひ
て。此まゝ手供申し。花をも眺（ナガ）
ていものかな。此まゝ手供申し（トモ）
めすぎるまでいな。唯今の言葉の末よ。
大原や小塩の山もけさこそは神代の事も
中（スデニ）　　前（疾ニシテ）
思ひ出づらめ。今處から面白ういな。これは
（柏子不合）
いうまる人の居詠歌まていぞ　事新
シテ（確カニ）　アタラ
しき問事かな。此大原野の行幸よ。

在原の業平供奉し給ひ時。カタジケナ
居の問事を思ひ出で。神代の事とは
中（伝ヲ持チテ、オンモリト）
詠みしとあり。申まつけてわれまづら。
そら怨ろしやあ天地の神の代より人
地上歌（聊カ蕭ヤカニ）
の身の妹背の道は浅からぬ　名殘
（柏十合）
小塩の山深み。名殘小塩の山深みのぼ
又　打切
りての世の物語。語るも昔男。おもれ

古りぬる身の年(シツメル)数きてもやひちるあり
けり数きてもやひぞなりける。(ロンギ上、引上テ、サラリ)　げよ
山賤のさもげよ。さぞふるくと見ゆる
も心ありける姿かな　(シテ上、素ト直ニ淀ミナク)心知られば
そも身の姿よ恥ぢぬ花の友よ馴れ
てさらば立ちらん　(地上、サラリ)立れや立れ老人の。
心若木の花の枝　(シテ中、朗カニ)老隠るやとかざ

さん　(地上、サラリ)かざしの袖を引きとどめられ。このも
のの蔭ごとよ　(シテ、奥カニ)貴賤の花見
輿車の。花の轅をかざりつれてよろ
ぼひさぞらひそりぐよ廻る盃の。
上元又二元天元天天元天元天元

ワキ付（落着テ）「不思議や今の老人の常人ならぬ見
えつるが。さてい小塩の神代の古跡。和光
の影よ業平の。花よ映じて衆生濟（カゝり上（スラリト））
度の。姿現し給へとぞ（拍子不合）思の露も
たまさかの思の露もたまさかの。光を
見るも花心。妙なる法の道のべよ。猶も
奇特を待ち居たり猶も奇特を待ち
居たり（後シテ出ヅ上（優美ニ若ヤギテ））「月やあらぬ春や昔の春
ならぬ。我が身ぞもとの。身も知らず（拍子不合）（打上）
ワキカゝり上（サラリ）「不思議やな今までは立つも知らぬ
花見車のやどりとおきし人のほ有様。
これいうまでもなしこれいうまでもなしシテ（優シテスラリ）「げにや及ばぬ
雲の上。花の姿はよも知らじ。（行（爽カニ））あり神
代の物語。姿現さざりあり、ワキ（サラリ）「あら

ありがたの事や。他生の縁ハ杉ちも
せで、（淀ミナク）契り人へも（ワキ）思ひぞ
いづる（シテ）（優ミ）花も今（地上歌）（拍子合）（品ヨクサラリ）けふこぞハ明日ハ
雪とぞ降りなまし。明日ハ雪とぞ降り
なまし。消えぬとぞ（切）ありと。花と見まや
と詠ぜしよ。今ハさらぬ花も雪も。皆
白雲の上人の櫻。ちぎりの袖ふれて花

（地拍子）花見車。暮ヲ（ヨセル）（ヨリ）ヨリ（ニモ）
クリ上ヲ（引ニテ・奥カミ）（拍子不合）見車暮るよりも日の。花よ待たるよ。
それ春宵一刻（ヒトキザミ）値千金。花ハ清香月
（シテサシ上）（雄カミサラリ）影。惜まるべきさて唯この時なり
●サシクセ獨吟（前ヲ承ケテハコビヨク）切迫雜子
（地）思ふ事いとでは唯よや止みぬべき
われも等しき人なれば。とハ思へ
ども人知れぬ。心の色ハおのづから思
ふ（ヒト）ふ（ヒト）ふ（ヒト）

●仕舞

ぞや（クセ中（後ニスラレト）拍子合）春日野の若紫のまき、衣。
（打切ヤ）
末のぶの乱れ限知らぬもと詠ぜしよ。
陸奥の信夫もぢずり誰ゆゑ乱れんと
地拍子
われ思ふ。やれ恋ならぬ。くるよと。詠みしも紫の
能、三番目ノ時ハめでーもり。
色よ深み香よめでしもりの唐衣。
著つ馴れ。つまし。おしば遥ど来
ぬる。旅ぢそ思ふ心の奥までいき

白雲のくだり日の都なれや東山。
これも京あづまのはてしなの人の心や
（奥カシ引立テ）
シテ上
武蔵野。ぱっぱふ。ふ焼きそ若草の
（前ヨリ運ビヨク）
地
妻もこもりわれもまたもる心大
原や。ふ塩ふ積く通路の行くへ同じ
恋種の。忘れめや。今も名ハ昔男ぞと
（シヲクル）
シテ中（寛クリト）
人もいふ。（拍子合）昔なる。花
序ノ舞
（長閑ニ花ヤカニ）
昔なる。花

●仕舞（拍子合）

シテ中（優シ）

も處も。月も春

地上

花も忘れじ

地上

花も忘れぬ

心や

地中（前ヲ承ケテタップリト）

ありし生涯を

（朗カニ淀ミナク）

シテ中（爽カニ）

小塩の

山風吹き乱れ散らせや散

（長閑ニ運ビテ）

地上

らせ。散り迷ふ末のもとあらら。まどろめば。

櫻よ結べる夢ぞ現ぞよひと定めよ。

夢ぞ現ぞよひと定めよ。寝てぞ覺め

てぞ春の夜の月。曙の花やぞ殘るらん。

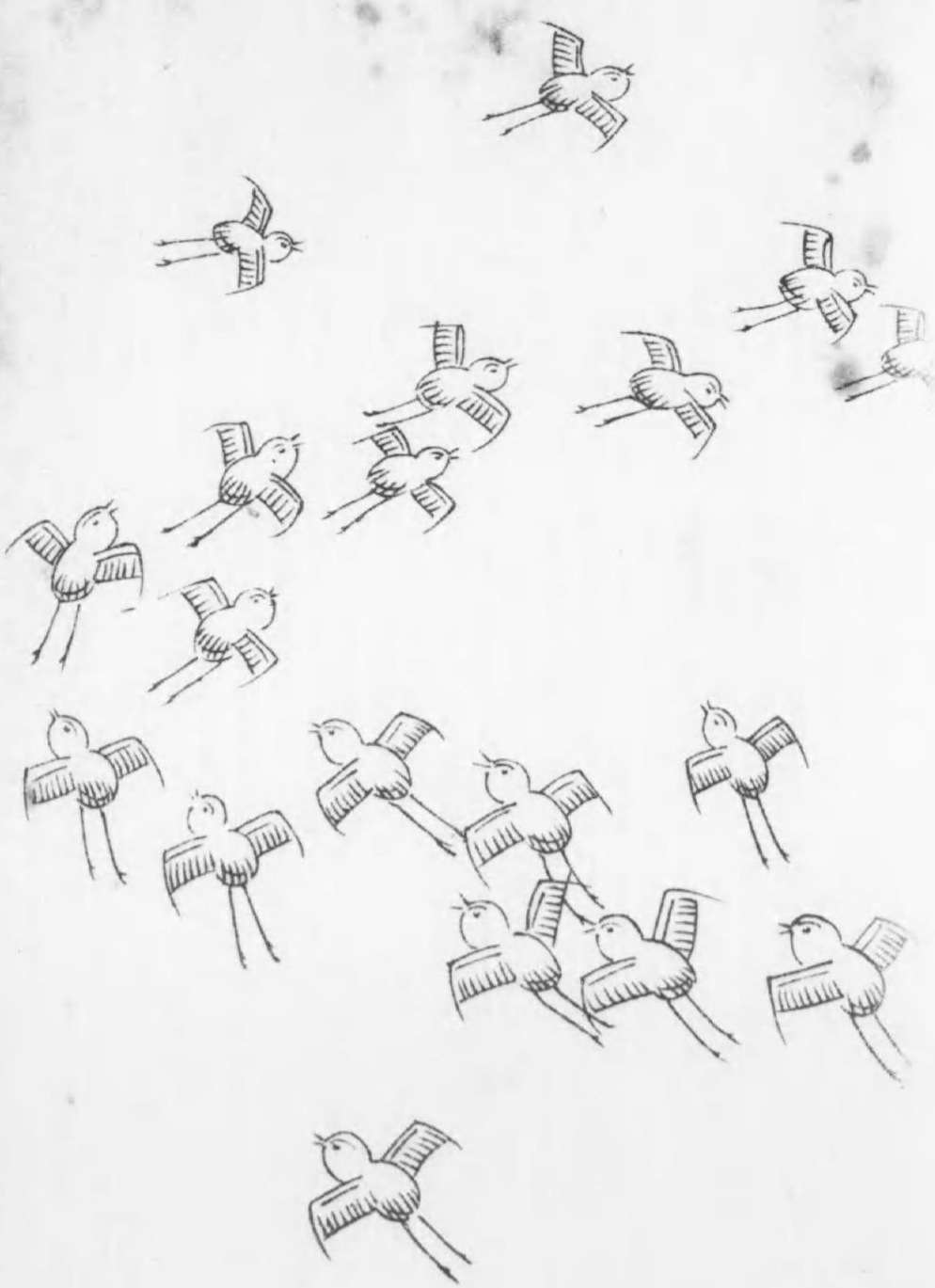
大正十四年三月二十八日印刷
大正十四年四月一日發行

觀世流改訂謠本
大正十三年版

訂正者　丸岡桂
東京市神田區今川小路三丁目九番地
發行者　土居源太郎
東京市神田區東松下町十二番地
印刷者　鈴木彌作
東京市神田區東松下町十二番地
印刷所　信英堂印刷所
東京市神田區今川小路三丁目九番地
發行所　觀世流改訂本刊行會
電話四谷　五九五七番
振替東京　一三四七五番

著作權所有
郵便規

284
331



蔡